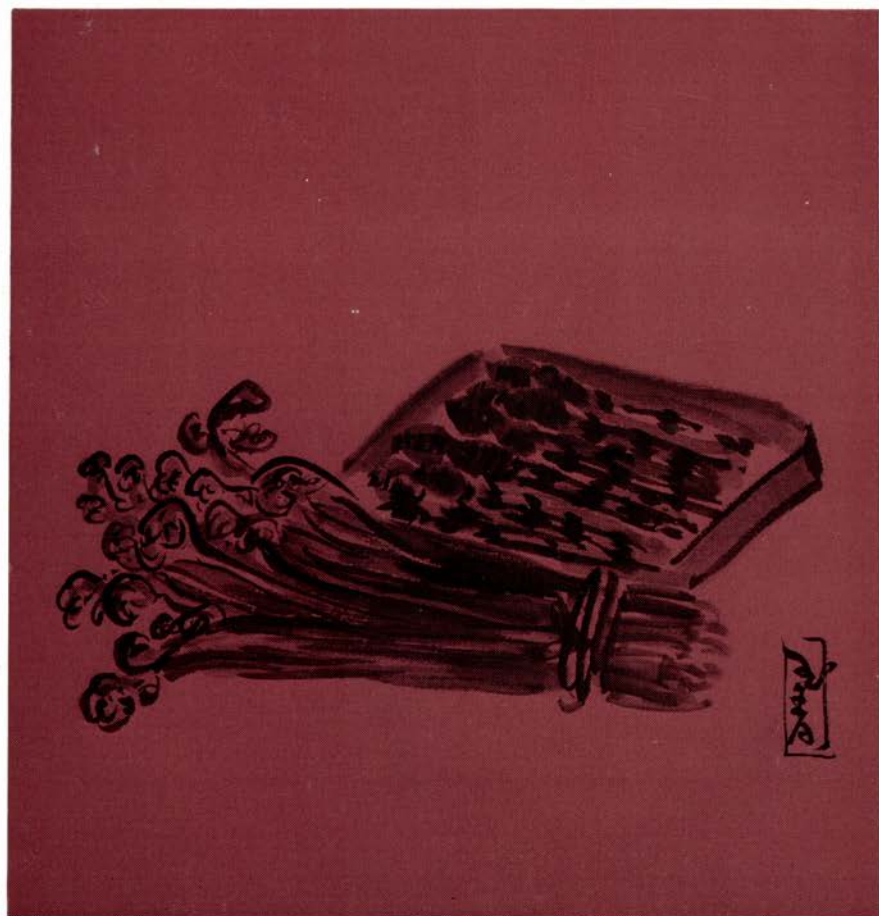


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第一種郵便物認可
昭和五十五年二月十五日印
昭和五十五年三月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷六三四号



日川協加盟

No. 634

三月号

市場没食子・市場カネ女 共著
傘寿・金婚記念句集「夫婦」刊行記念句会

日時 昭和55年3月7日(金) 六時から
会場 金属会館

地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271・3935番

柳話

中島生々庵

謝選題

「夫婦」 市場没食子
「傘」 若柳潮花選

兼題

「針」 大坂形水選
「葉」 菊沢小松園選

席題

一題(当日発表) 各題三句
千円(句集謹呈)

主催 川柳塔社

★

序文 中島生々庵

美装箱入りノ

題字 中島小石

一一九二句ノ

装画 市場カネ女

三六三ページ

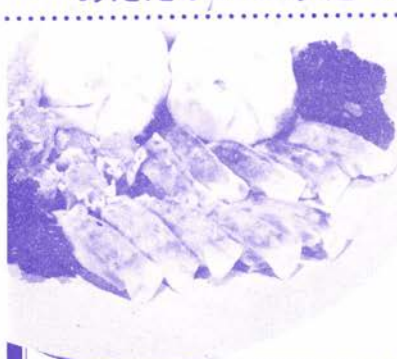
編集 不二田一三夫

頒価千円ノ共

▼全盛期の路郎選による四十年間の成果をここに
川柳句集「夫婦」を刊行。ぜひ一読をノ

▼限定版五百部売り切れました

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん

やきぎょうざ

豚饅・焼餃子

しゅうまい

ちやあしゅうまん

焼売・叉焼饅

大阪・なんば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

日本一の富士

1月14日正午新大阪発で私夫妻は東京に向
つた。年に一度、義兄義弟の五夫婦が会食す
る例会に出席するためである。昨年は半蔵門
前、今年は吉祥寺という風に20年近く続いて
いるのであるが、会場はなるべく安直で、老
人むきの料理で、ゆっくり出来るところでと
勝手な条件だが、そこは当番世話人の腕の見
せどころ。なにしろ「高齢ばかりで俗にいう
来年のことを言」と鬼が笑おうという会で
ある。イランがどうした、KDDがどうした

等の話はタブー。「黙っておれについてこい」
式の関白宣言は遠い過去の語り草。割り当て
のビール一本で、可愛らしい顔つきになって
来るのである。それにしても、前日の東京は
大雪。車窓から見る富士の姿は晴れ上がった
蒼空にくっきり。絵の心得も文才もない悲し
さに適当な日本語が見つからぬ。英語のワン
ダフルがびつたりと逃げる外はない。折も折、
車内販売の声がするではないか。『水わりは
いか』

雪どけに成人の日の裾さばき
老境に早春のけはい蒼く晴れ
身の程を知るから重く行き詰り
頬づえで机の蠅に語りかけ
忍従につくり笑いはやめたまえ

中島生々庵

川柳塔三月号

座右の句

張りかえた障子の中に母います

(槇)

私の句

母のまつ土橋もおぼろ山の里

佐伯越子

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

日本一の富士

中島生々庵 (1)

川柳を売り広めよう

長野文庫 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(二八丁)

(28)

入江 勇・清 博美・八木敬一・西原 亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木 黄・室山三柳・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

川村好郎選 (30)

柄井川柳は始祖ではない (川柳太平記 ②)

東野大八 (26)

秀句鑑賞

(同人吟)

若柳潮花 (24)

(水煙抄)

三井醉夢 (37)

愛染帖

橘高薫風選 (38)

女性作家のプロファイル

不二田一三夫 (42)

路郎選・古川柳の味

八木摩太郎 (41)

川柳を

売り広めよう

長野文庫

時々「作家の若返えり」に就ての記事を見るが、これは独り川柳界のみでなく、俳句界、短歌界にも同じような悩みがあるらしい。

先達でも松山市から発行している俳句の雑誌に「青少年に俳句を作らせよう運動を展開したい」旨の意見開陳があったのでも分る。

川柳界では広島県竹原市の山内静水氏とか富山県高岡市の能坂美範氏とかが少年作家の養成に力を入れており効果を挙げている例がある。愛媛県でも東宇和郡野村町の兵頭まもる氏夫妻が熱心に指導して作品集を出したし今治市でも越智史風氏が小学五、六年生を対象に「川柳学校」を開講している。特に竹原市では立派に育て上げて小島蘭幸君以下数名の好作家を開花させたことは衆知の通りである。このほかにもこうした事例は方々にあるようだが、指導者のご努力が結ばれてほしいものである。

青少年を育てて作家の若返えりを計ることは頼もしいことで、是非各地でこうした運動を盛り上げたいと思うと同時に「五年十年の

吉永川柳社訪問

一分間の柳論

雅号ぶっちゃけばなし

本社句会の題について

初歩教室

大萬川柳「片手」

柳界展望

本社二月句会

各地柳壇（佳句地10選）

「服飾」

一路集「保険」

「しつけ糸」

編集後記

児島与呂志 塩満 敏 46

時広一路 44

白岩文衛 47

不二田一三夫 45

本田恵二朗 50

川村好郎選 52

（庸佑・整理） 54

植村客遊子選 55

梅みどり選 61

藤村メ女選 48

高橋操子選 49

（一三夫・葉子） 65

座右の句

捨て場所がないポケットの石一つ

私の句

汲み交す子へ男としての父

（幸）

清野こう

若返り策」も有効だろう。

つまり、現在七十歳台の人が六十歳台の人々を、六十歳台の人が五十歳台の人を、五十歳台の柳人は四十歳台の人への呼びかけ運動をしらと思うのである。

おじいさんが孫を川柳作家に仕立てて作家の平均年齢を急降下させることに異議はないが、仲々容易なことではない。

竹原市で成功したのは静水氏が異状な熱心で指導したこと、根気強く守りたてたこと、物心両面の犠牲を払ったことなどがあつての結果であつて、ちよつと真似の出来ない芸当なのである。それより年齢に隔差のない人々への普及運動の方が容易ではあるまいか。

とに角、今年は川柳普及の年として、あの手この手の活動をしたいものである。

それと同時に、そつした普及活動に貢献した人とか結社の表彰をしたいとも思う。

現在、作品に対する賞はあるが「努力賞」とか「普及賞」とかは聞かないが、表彰の価値が充分ある。

余談であるが、地方新聞社で「呈賞」として川柳を募集すると、意外に応募が多い。呈賞に釣られて作句を始める人も多いことを考え合せ「賞」の活用も重要だと思ふ。

要するに、作家として作句活動を活潑にすると共に「川柳セールスマン」として大いに川柳の売り広めをやり度いものだ。

六十一まだ情熱は燃えに燃え 路郎
お互いに、川柳の火を燃やせねば。



若本多久志選

大阪市 江城 修史

帰省子の笑顔一家を春にする
帰省子と夢あたためた三カ日
恙なく命継ぎ足す初春を酌み
福笹が不況の街に譜を作る
鍋の湯気心の和む膳にする
春を呼ぶチラシに遠き居職の灯

美祿市 安平次 弘道

ターミナル恋が生れて恋が消え
病床で生命線を見る弱気
税務署で中流意識引っこめる
窓際族馬鹿になりきる修行かも
遅刻した訳はしゃべらぬ定期券
一期一会誤解はとけぬまま別れ

泉佐野市 阿 萬 萬 的

冬の声そこまで銀杏は散り急ぐ

柚子風呂へ妻つれて来たはしやぎよう
愚痴っぽくなつたと気付く冬の緑
石仏今年も鷗が来てる海見てる
人間ぎらいな石仏もいた冬の道
梅を見る老人の背に嘘がない

鳥取県 川崎 秋女

触れさせてバラ美しい棘をもつ
日銭追う男が濡らすコップ酒
去に際に女が見せた笑い顔
脈のない言葉心に繰り返す
ほんとうのケチでなかった奉賀帳
日めくりのひと日ひと日にある重み

尼崎市 黒川 紫香

水車コトコト雪を落して春が来る
大阪の人ごみを見て旅終る
老猿の孤独戻れる山がない

多すぎて亡妻の星見つからぬ
水子・地藏同じ笑顔が影をもつ

倉敷市 野田素身郎

暇をもてあました末の初詣

どういふ年になるか知らぬが屠蘇を酌む

期末テスト終つて琴の音もさえる

立ったり座ったり今度は何をねだる妻

二十歳を待つてたように息子飲み

大阪市 中川滋雀

玉砂利へ願ひあらたな歩で進む

墨摩つてから書初めは間をもたせ

身のほどを知る福笹は小さく持ち

耐えている木々から冬の私語を聞く

アタックの甘さに他人のままの距離

富田林市 岩田美代

日めくりの厚さに始まる猿芝居

スーパで夫婦の溝の橋を買う

きりきりと悔が渦まく冬の底

今日の罪昨日の罪は葬ろう

やさしくて気ぶくれて男の貌がない

米子市 八木千代

泣くまいと永雨の道の歩を止めず

永劫の愛を別れのてのひらに

まだ夢のつづきでパンを二枚焼く
ひとり漕ぐ海よ よろめく權ながら

水晶のじゅうず逃げ切れぬ輪廻かな

神戸市 仲 どんたく

初春を満零歳にリードされ

功成らず名も遂げず老いの温かい日日

補聴器で息子夫婦へ割つて入り

値切り足らんかったか一茎添えてくれ

煩惱を弔らうごとし除夜の鐘

島根県 飯塚虎秋

ふるさとの月の丸さと温い冬

急流の絆が重いもやい舟

減反の恨みを閉じて数珠を繰る

忘却の記憶に心の飢えがある

嘘一つ心の隅でかびとなる

青森市 工藤甲吉

徹夜して玉虫色を答申し

ずばりズバズバと野人は清々し

溜息のようにまたたく灯もまじり

真冬日の水は仏の齒にも泌み

いつも浩然と小便小僧さん

島根県 大野酔夢

その夢は豊かに少女の海に満つ

健康な父母ふる里にある誇り

家計簿の影に良妻奮起する

血と汗で人間地球にドラマ描く
かも知れぬ福を夢見て宝くじ

大阪市 本多柳志

血圧のくすり屠蘇より先に服み
印刷の賀状に万福を祈られる

妻にまだ女が残る姫鏡

心臓の強さを賞める聴診器

充電された顔で出て行く月曜日

松原市 谷垣史好

へちまゆらゆら酔生夢死の一生か

牛井の肉もおいらも落ちこぼれ

人間のやさしさを恋うしやれこうべ

暖冬や口にしまりのない男

一月が終る足枷解くように

米子市 林瑞枝

北風の似合う働き嘘を持ち

何もなかったら良いとする達磨の目

想いはるか賀状にこもる愛を抱く

折返し点と云う白寿の意気に触れ

生い立ちはどうあれ築く鐘の音

大阪市 川口弘生

薬効は債鬼忘れる屠蘇の酒

三日月に祈る日もある離れ猿

鶯を待たぬは嘘になる古梅

朝起きて今日のノルマを思う古い

傷心へ神は時間という処方

岸和田市 高橋操子

四十九日も来ぬに再婚もうのり気

あの頃の衣服はみんな米に化け

顔立てた見合のり気になってくる

猫抱いて見送っている二号さん

初恋を抱いたまんまの角かくし

倉吉市 奥谷弘朗

省エネの年金ぐらしに寒い冬

年輪に研ぎすまされた顔の艶

草分けの根回し今にして光り

いのちある一句生みたい願いごと

読み返す賀状が友の顔となる

米子市 小西雄々

初孫誕生

やわらかい冬陽が孫の頬を染め

ワイシャツの白さへいやな喉仏

ご随意にと言われて迷う布施の額

和服着るのにバスタオル腰に巻き

中年と気付き鏡を拭きなおい

平田市 久家代仕男

汚職記事なるほど税の不公平

善の声掻き消して散る波の花

車窓から岩場を覗く釣りマニア

米ばなれ瑞穂の語感格が落ち

持ち味を少しばかりしておく墨絵

寝屋川市 江口度

空出張梅の匂いはとどかない
縮むだけ縮むと明日が見えてくる
目をつむるときに祈りが少しある
あきらめたのは目覚ましのベルの方
背な向けて女の涙から逃げる

大阪市 本間 満津子

省エネは良し野菜に四季が還るかも
遠い星見つめて長生きしたくなり
余白ある楽しさ夢を持ちつづけ
ご進物だけに黄色いダイヤ売れ
祝入営形見の盃欠けもせず

和歌山市 野村 太茂津

企みをいつもむきだし悪人でいる
泡沫と消えても歓喜それでよし
執念に水をかければ尚燃える
出藍の誉れをいつも待つ男
崩れてはならぬ凍夜の脈を読み

竹原市 時 広 一 路

風無色人間様は彩をつけ
追い越しを待つ足踏みが疲れ出す
欲望の地図少しずつ塗り変える
地獄耳自分の噂よう聞かず
中年の反抗足がよろけ出す

和泉市 西岡 洛 醉
参道に老いの息災霜を踏む

食欲の朝へ雀が来て喋べり
湯けむりに妻の裸身が他人めき
風飄々老いの一徹ためす音
さて今日はどの手で男靴を履く

鳥取県 福田 保子

善人の十指はケチること知らぬ
たくらみを知らぬ女の白い肌
醜男の愛は一途に牛洗う
水子地藏拝めば未婚の母が泣き
捨てられた女が泣けば星が降り

倉敷市 田 垣 方 大

音のない活字世の中騒がしい
立場上言うていますという弱気
浮袋成人式につけたまま
両親の敷いたレールは先が見え
船の銅羅陽気な音で泣いている

大阪市 金 井 文 秋

善意まだ実らず終る児童年
減点にならぬスターの離婚歴
負け犬でよいと悟れぬから焦り
忘れやすく覚え難きを齢と知る
打算のない恋を両親危なかり

宝塚市 傍 島 静 馬

ハミングで娘まあるく掃いている
枯すすきの中に炭住捨ててある

みがき上げたお鈴に老母聞き惚れる
折れそうな老父だけ体操つづけてる
医師はまだ飲酒OKする気なし

岡山県 出原 敬一

善後策樂觀組は箸をとり
濡れて来た友情串柿置いて去に
逆襲の妻裏切りを武器にする
朗らかな年詞程好い酔いを持ち
獅子舞に初めて会った児の瞳

笠岡市 木山 遠二

目も耳もまだ役に立ち年惜む
八十路なお長命祈る初詣
辞書だけの机に端座八十の春
三が日過ぎてのんびり見る賀状
十七字にする日本語よ骨が折れ

鳥取市 小林 由多香

うそつけぬ母へ約束多すぎる
煩惱へ今日のふとんが重すぎる
こたつにも父の座があり和を保つ
叩かれぬ距離は置いてる口答え
口答えしてる涙に負かされる

今治市 月原 宵明

慈悲抱いて大師乱世へ目を細め
台所主婦の砦として覗き
男みな嘘つきに見え墜ちてゆく

勲章を吊ってやりたい割烹着
粹外で囑託と言う艶さげ

藤井寺市 中原 比呂志

半分はあきらめているらし妻無口
北風へ若いペタルが割って行き
点検の響きも凍る台車下
残雪の下でゆっくり春動く
礼装のつくし堤防に春を呼び

米子市 増田 竹馬

喜寿旺んまだ中年の心意気
中年を彩で言うならいぶし銀
ぜいたくな願ひ雪乞いと云う神事
独乙語を知っていたとは医者不覚
押し売りが流し目で見える男下駄

竹原市 古谷 節夫

辞書繰って男盛りを確とみる
還暦へ軍歌のリズム狂わない
脇役の芸が主役を作りあげ
苦節三十年タルマに目が入り
生命線だけが取り柄の男かも

鳥取県 林 露杖

肚探り合って互いにむだ話
一石を投じて出方をじっと待ち
自己嫌悪蓋を開かぬ貝となり
岩砕く水方円に逆らわず

六十三まだ働きに堪ゆる幸

東大阪市

本多清人

兵庫県

北山越山

中流がどつと師走の百貨店

豪勢なマンション無職の女住む

梅の木にそつと結んだみくじ吉

落し主とともに喜ぶ謝礼金

雨水一滴大海までの運不運

東大阪市

萩尾真佐志

八尾市

高橋夕花

敗戦記それから俺の無神論

健康器平均寿命また延ばし

子の成長肴に心地よいお酒

腹割った話のハラをまだ探り

よう飲んだ人かと死因確かめる

岸和田市

狭間希久志

島根県

錦織文子

旅先で思わぬ情受けた老い

廃船がぼつんと座る冬の浜

老婆と三猿守つて嫁と住み

寒風に耐えてバイトが朝を行く

美辞麗句並べて賞めてる目ではなく

大阪市

河野君子

和歌山市

坂口公子

初夢の中の私は翔んでいた

娘と向う鏡あせりの彩を持つ

三猿の一つがそむく老婆心

定年後の夫 人間臭くなる

てのひらにいくたび盛りし善と悪

身につまる話は妻の胃にこたえ

瞳すえて女にだつてある決意

かたつむりそろそろ思案きめた つの

妥協して妥協して靴が片ちびる

停年の枝は若芽の為に切り

八尾市

高橋夕花

仏心とおもうべきかなお元日

夫の肩ごしてよし初詣で

転居から新春を迎えた客疲れ

スタートラインにいつも心を置いてある

非常識な言葉も時に鞭にする

島根県

錦織文子

娘らの声受話器へ乗せて年賀来る

人生の折返し点をおおらかに

若水へ亡母のしきたり生きつづけ

はんのりと酔うて夫婦にある対話

帯止めに女残して一人住み

和歌山市

坂口公子

老醜を蹴とばすバネのきいた足

「純愛」それは鋭い刃物です

素裸になつて毅然と立つ冬木

関白宣言弱い男の裏表

ひと色が足らぬと鏡はやいてる

和歌山市

松原寿子

北風を受けて貫く道もある
忍従の女の川が背なにある
愛と言う暖房あなたの胸にある
祈るほど背に十字架が重くなる
白梅の清さへ明日の夢を盛る

和歌山市

浦野和子

逆境をキリッと泳いでいる和服
これしきを喜ぶ母は古い給う
他人には見せぬ涙は拭かず置く
釦一つかけ忘れている自画像で
ボケ役もこなして無事なお元日

大阪市

小出智子

あたたかなものに故郷の雪日より
一月も終りの風船姿みだす
言いたいことあるまま夫婦三日過ぎ
ゆとりある時計を一つ別にもち
なすすべもなく受験期の母の膝

新宮市

大矢十郎

廻したい歳暮へ頑固なセロテープ
横綱に勝ってうつむく勝名乗り
子は受験父は句会の日が迫り
耳うちの人を味方にして孤独
目をつむります海外の浮気なら

島根県

堀江芳子

頼もしい夫の背老いを刻むとも

そつけない返事へ次の語をぬくめ
なに気兼ねなくても妻という立場
理で押せば冷たいものが背を走る
一心同体夫の目にはなりきれぬ

八尾市

高杉鬼遊

泣き虫へ大山白く喪に服す
逢いにゆく忙中忙は路地を抜け
縄電車おしつこの子が一人下り
日本にジャンケンと言う知恵があり
ちちははの墓 大寒を抱きしめる

富田林市

板尾岳人

白い峰ワイングラスが欲しくなる
踏めば鳴る新雪白い音なりし
友達の友達と来て雪景色
雪解けの水真すぐに母の声
雪を踏む男に少しある情け

大阪市

大坂形水

搦め手から落しにかかる贈答品
スポンサーが居るのでカットする編集
昼と夜を間違えて鳴る柱時計
健康法訊くと九時には寝るといふ
人間なら百歳という犬が病む

大阪市

不二田 一三夫

陽気ボカボカ気狂いじみてくる会話
武士道も軍歌も知らず散る桜

チャップリン氏の靴に似てくる父の靴
杖買えば杖つく人の多いこと
枯れ葉あつめては喪服縫う女

高槻市 若柳潮花

盆栽にされて一と足早う咲き
紅格子帰る妓を待つ灯がとる
ど根性を見せて投げ込むおさい銭
黒髪を濡らして春の雪がとけ

西宮市 島居白宗
(百酒改メ)

山茶花の炎えて師走の詩を奏で
石臼が想い出誘う故里の蔵
場違いへ従容として冬の蠅
肩の荷を下して寂しい子の巢立ち

堺市 高橋千万子

おごりましよう男は株を上げたがる
再会が是か非か胸で賽を振る
返事まだ出来ず微笑で返しとく
ハンカチを渡す夫へ云いふくめ

出雲市 原独仙

喜寿夫婦無難に越せて新春を酌む
まだ筆の持てる慶び年賀の詩
書初めは『米寿』孫等が拍手する
初夢は大それた夢ああ寝汗

高槻市 辻白溪子

湯の通り下駄も情緒の音で過ぎ
梯子した一軒覚えてないマツチ
外人を負かしたスポーツ記事が派手
円満へ戻す仲人策も尽き

東大阪市 市場没食子

賀状書き終えた所へ喪の欠札
養嗣子が跡目 サラブの血は騒ぐ
共稼ぎ亭主関白阿呆かいな
食うための変身初志は温めつ

松江市 中川晃男

省エネの力ためとく寝正月
おみくじの大吉当てに嫁きおくれ
振り出しに戻り今年も叱られる
老妻の返事素直でわびしかり

奈良市 森田カズエ

戦争を知らぬ飯盒背にくくり
高官の誰れにやろうか演技賞
方円の水に学ぼう処世術
口笛を吹いて定年忘れよう

島根県 西村早苗

亡妻の夢見た初夢と云う朝に
反対を押し切り好きと云う度胸
運命線もうくたくな余生病む
土臭いのもいて新春の顔揃う

今治市 長野文庫

美容院客にも徹夜させて新春
大みそからが露店のお元日
これが幸 他人の目にはあわれとも
苦勞したなどとは言わぬから床し

橿原市

岩 井 本蔭棒

農を継ぐあぐらは寒し嫁が来ず
保証書が切れる頃からがたがくる
一徹は教育勅語のまんま生き
霜柱踏む快感が残る足

鳥取県

鈴 木 村諷子

過去伏せた尼僧のひとり楚々と住む
遺言にまだ煩惱の吹きだまり
一九八〇年この猫と俺生きて
答案のない宿題の坂よじる

倉敷市

水 粉 千 翁

この迷い晴れるに遠き石を蹴り
良心を責める鼓動が乱れない
夫からほめてもらえぬお茶を入れ
勝ったとははかなきものの一里塚

桜井市

岩 本 雀踊子

土に帰えず父の命の送り火で
利を払う金に人情などもたぬ
忘れたい貧しさに酔う父の酒
叱るとき父は悲しい顔になる

神戸市

中 村 ゆきを

知恵おくれ慈母親音の知恵に触れ
元日の陽の中にいる親子猿
小料理屋蛇の目返してから馴染
青年の主張どころか漫画本

寝屋川市

柴 田 英壬子

立春や邪心を払う鰯焼く
盆栽の梅気味わるいほど開き
梅見頃はお棘す風もころろよし
はるを呼ぶころろに芽ぶく露の臺

岡山県

嘉 数 千代香

断絶の向うで古傷が疼く
あきらめて沈めば石のやすらぎよ
曲り角の農夫を責める物価高
雑木林の秘密を風に盗まれる

倉敷市

藤 井 春日

天下取る男にあつた迷い路
デイスコから疲れて戻る娘に疲れ
インタビューさわると痛いところに触れ
日向椽心のアルバムめくる老

大阪市

那 須 鎮彦

愛の隣りに孤独の椅子がある
悟りまだ未熟な父のきれいい汗
何代も重荷を背負うかたつむり
足踏みをしないう夫婦の青写真

和歌山市

津 田 与史

淡々と生かしてくれぬ風が吹く

六十の皺に自叙伝書いてある

猿芝居の猿の姿を笑えるか

流される身に泥水は避けられず

藤井寺市

児島 与呂志

気心も知らんまんまで酔う握手

かずのこの売れ残りだから買うてくる

真直ぐな心がのぞく新春の道

うつむいて歩けばみじめな靴の音

大阪市

河井 庸 佑

明日には夢がかなうと信じこみ

予備校とさよならしたい今年こそ

卒業のわが子頼もしくも感じ

よいことがありそう通勤道を変え

倉敷市

稲田 豊 作

マンネリになるななるなの日課表

大臣が小さく見える日の憂鬱

三猿になりたき日なり部屋籠り

半纏の脱げる日溜りありがたし

鳥取市

両川 洋 々

盃も愛の破局を知って冷え

明日に夢あるから毛虫生きている

増税がどうあれコタツで燗が待ち

思春期のおんな鎧の中で燃え

大阪市

欄 蘭

目分量でおふくろの味出来上り

当麻寺心も和ごむ寒ぼたん

夜警する夫に済まなく宵寝する

万が一同い思いで並ぶくじ

三重県

坪田 冬 花

貸した日の期限に友も敵になり

母の瞳は怖くかなしい優しい目

戦前と戦後が恥の事でもめ

なにも無いからぐっすり眠られる

島根県

小砂 白 汀

雑草の種から雑草が生え

叩いても鳴らぬ太鼓は誰の罪

さよならをした海またも春になり

切り花の哀れやしばし水を呑む

大田市

藤田 軒太楼

片言の孫中にして新春集う

老碌と思いたくない肘を張る

見解の相違さ上司の顔をたて

暖房になれて文化の風邪を引き

兵庫県

遠山 可 住

台本のミスで還れる椅子が無い

役人には惜しい男へ酌いであげ

素人に読める書道は選に洩れ

芸のない妓に一人前飲まれ

岡山市

川端 柳 子

おでんぐつぐつ心細さをかばうもの
子と話すみかんは昔の味がして
信用もしてますおうらみ申します
十ば一からげで小さな幸と居る

大阪市

天正千梢

もつれる足で六十の坂のぼりかけ
命綱にぎれば足がふるえ出し
元朝や金魚鉢へもおめでとう
ばあさんの出る幕じやない読みつけ

八尾市

香川酔々

梅活ける尼僧の過去は火の女
石仏のあばたに春陽一つずつ
月へ飛ぶ夢は忘れぬ竹とんぼ
見物の中の一員貧詩人

大阪市

山川阿茶

眼ざましから開放されて三カ日
早起きの窓辺の月へお早うさん
散りもせずなんで枯葉よしがみつく
吊り橋が落ちると神のお告げなし

島根県

堀江正朗

酔うて寝るときにもありがとうが言え
寒行の鐘経となり胸に泌む
しあわせが覗く冬の陽のように
小さくても芽をもつ花は燃えている

西宮市

藤村メ女

別れたくない二人へ月冴える
私だけの喜び涙ふかずとも
クイズ解く親子にダンロの火が温い
冷やかな気品に触れる初対面

島根県

梅みどり

絹ずれの白足袋春の客となる
子守唄すんだ瞳に吸いとられ
共稼ぎいたわる夕餉の幕おろす
煩惱へやんわり春の陽炎えてくる

和歌山市

内芝としよ

我がままが通らないから世は偷し
迷う道たった一つの子の灯り
釘一本打つにも心覗いてる
人の真似するなと猿は子に躰け

羽曳野市

塩満敏

正月の駅もせめての松を生け
寒いのに松屋町では鯉のぼり
流行のカラーはバリから飛んでくる
何事と見ればデパート御開店

大阪市

北勝美

蛙の子大地の温もり知っている
プリズムを当て今年の彩を選ぶ
ポイ捨てへ都会の恥もすてである
三猿を八白土星嚙みしめる

松江市

梅本登美也

連作を土の誇りが許さない
猿廻し剽軽者にうってつけ
万引も隅に乘せてるエレベーター
フライパン女の愚痴もからませる

大阪市

津 守 柳 伸

働ける幸は三度のうまい飯
やれるだけやって辛抱する誇り
薄幸な女に似合う寒椿
ひとりのパントマイムも新春の風

鳥取市

有 田 とし江

消されない愛は心に秘めておく
記念樹の咲くたび老いが忍び寄り
猿同士張り合う将棋に駒がない
うわべなど飾らぬ心を磨きたし

東大阪市

斎 藤 三十四

本職より歌が上手とほめ言葉
酒の唄で男の世界酔わしてる
初孫を囲みカメラは春の色
今年は数の子抜いた屠蘇の膳

川西市

戸 田 古 方

注連白い間は神さんいやはるやろ
日本だけやそんな日本のお正月
立志伝がめついとこはふせておく
勧善懲悪何やしらんが綺麗ごと

笠岡市

松 本 忠 三

三カ日過ぎて亭主の座にもどり
バイバイとだけ外孫のあつけない
約束の孫の小指に借りがあり
よれよれの千円札で貸しを受け

奈良県

村 上 春 巳

一〇円の賽銭豊作を確信す
小心の喜怒哀楽に酒がある
手袋を片方落して春近し
新築は時計の音も新しい

島根県

大 森 孝 華

お茶をつぐ音のみ冴えて夜のしじま
ひとり居の気楽へ今日の日が愛し
ふる里の土の香りにある余生
体験を語る素顔よ胸の冴え

呉市

横 田 英 詩

弥生の句七草粥を喰べながら
狼の指輪も愛も模造品
三日坊主の釣り手で雑魚が生き延びる
大往生夢みる老いの背が丸い

松江市

小 林 孤呂二

お元日早々神様へすがりつき
真つ冬の囲炉へ訛り忘れてず
夢追い酒にしてはお歳をとり過ぎる
政治家の嘘にも馴れてきた強さ

兵庫県

大 江 秋 月

漬物で酒飲み交す友が来る

梅一輪生けて娘の部屋にする

電線にのっかっている三日月

無人駅破れた傘を借りてくる

呉市 林野甦光

古戦場の夕焼け童話が置いてある

人間未完 でも一流の三代目

階段の一つ一つに実る椅子

ストロボの錯覚美人の方へ向き

大阪市 室谷徹舟

それぞれの顔偲びつつ賀状書く

年金で妻に済まない十二月

子に譲る道を夫婦で切り開く

御先祖がローンのお墓で狭くいる

大阪市 神田秀峰

星の数あるなか妻を見付け出し

ギャンブルに走れと総理大臣賞

叱らない親父で子供横に伸び

犯罪のスクープ儲かる週刊紙

京都市 都倉求芽

ゆっくりと山は初日を押し上げる

女は天才涙を流すタイミング

蟹気楼のように山腹に浮く団地

負け犬を霧が一人にさせてくれ

岡山市 時末一灯

ボタン穴かけ違えたまま五十年

独居の目めくり去年のまま眠る

中年のヒップ殊更ふてぶてし

酒友ではあっても友でなくて醒め

玉野市 小谷仙山

進化論蟻よお前も知ってるか

男嫌い女嫌いで時期を待ち

妥協する気持の裏の寒椿

遠まわりして矢印に辿りつき

出雲市 高橋可保留

トソ気味の猿も舞い込む年賀状

お行儀へ母が睨んで子へ合図

留守番の不覚を責める炊飯器

方言がもつれ合ってる湯治客

宇部市 平田実男

叩いてる方も泣いてる愛の鞭

ソロバンはちゃんとはじいて赤い札

鈴を振るほどに賽銭投げていず

申年の僕をあやつる妻でよし

兵庫県 河原みのる

乞食にも投げない金を神に投げ

80のあといく度ぞ注連飾る

元日早々死の話になっていた

リズムミカル自然がなせる漏りの音

鳥取市 大塚豊生

一刻千金老婆と初茶の湯

鑑賞の用に足すのみ壺飾る

約束のように田を打ち種を蒔き

石橋を叩き約束たしかめる

鳥取市

岸 本 無 人

手を合すあなたの嘘に負けておく

同じ柄特売場で又出逢い

母の目におくてと見える漫画本

負け色が濃いくて明日の風を待ち

守口市

羽 原 静 歩

馬券二度当ってからの競馬狂

語り継ぐことばを持って生きる幸

デジタルの秒針コツコツデートする

朝々の剃刀朝々のムード剃る

羽咋市

三 宅 ろ 亭

荒れる夜よ沈思黙考するもよし

数えさす駅階段に親子連れ

七人の敵へ今朝も靴鳴らす

あれからは他人行儀のおつき合い

大阪市

横 地 雅 風

古い服いつまで生きると妻が聞く

うかつにも飛乗り遅刻の逆コース

明治村訪えば時計をぼんと聞く

教員のまじめに生徒あくびする

守口市

野 呂 右 近

うるそうて敵わん妻に頼る日日

八十年の改札口を無事に抜け

再婚も離婚も許して呉れぬ歳

白髪に施肥するように読みふけり

大阪市

西 川 善 紫

残業せよせよと仕事尻叩く

言い勝ちはしたがそれから出来た溝

よそ行きの言葉慌てて舌を噛み

五十回忌の亡母

母逝き半世紀でも亡母まだ恋し

松江市

恒 松 町 紅

系統が音痴で披露宴苦手

三猿で或る日は耳に蓋をする

親と子の声間違えて電話口

健康のリズム狂わせ三カ日

京都市

松 川 杜 的

悪役の素顔で語ればあったかし

亡母の顔夢の中では未だ老いず

その昔脱帽された二の鳥居

何百万分の一の奇蹟も買うて十二月

島根県

藤 井 明 朗

人生の峠へ明日を大事にす

節約の一步くらしの向きをかせ

道楽をした白髪とは妻がいう

梅古木ほのかに匂う過疎の里

仙台市 川村映輝

蛇口からちよろちよろ春がやってくる

医者でさえ自分の病気に自信ない

明日の日を確信できぬ歳になり

割箸を器用に使って日本通

伊丹市 榎谷寿馬

屠蘇機嫌見計ってるお年玉

巫女の酒おなじテンポで酌ぎ続け

賞品の酒は泪も知っている

盃の一つが孤独のままで宴

京都市 山本規不風

相い性を合わせぬ永い孤高の灯

銭湯で空巢が聞いている旅行

返事せぬ母の笑顔に責められる

退職の近い課長は席に居す

竹原市 山内静水

明けまして財布の中身減ってゆく

新婚に戻れず茶のみ友にもまだなれず

参加した意義一員として運ぶお茶

抜き足さし足老妻におどかされ

倉敷市 斎藤通風

家紋には母の涙も綴られて

五枚ハセ借物なのか舞扇

土壇場の小細工疵を深くする

戦場に捨てた青春読む戦記

松江市 柳楽鶴丸

夫婦円満言葉のキヤッチボール

夢路の絵切れれば赤い血が出そう

自然に感謝して酌む雪見酒

子供から○妻からは何時も×

大阪市 藤田頂留子

無造作に入れてた小銭に助けられ

三カ日すめば書くこともない日記

寝て食ってテレビですぎた三カ日

真つすぐな道と本人信じ行く

熊野市 西久保苔石

神詣心さっぱり身に軽し

朝からの使い走り子を子に感謝

八十年乗せて紙鳶々よく揚る

逝く秋の孤城雲間へちらとみせ

和歌山市 福本英子

嘘一つ抱いて夜長を持て余し

決心の孤独へ迫る他人の瞳

ときめきの夜は明るいところが好き

目を皿にしても相場の底を売り

枚方市 稲葉星斗

清流の紅葉を背にイワナ釣り

海ありて世界は広し釣り談義

手間かかる仕掛け直しに老いの坂

迎春の賀状ダブッておめでたい

神様もお困り願ひごと多すぎる

大阪市

黒田 真砂

点と線辿つて女の歩む道

大いなる夢を記して初日記

ショッピング心の憂さを金で捨て

岡山市

井上 柳五郎

掌を合わせなにか祈ろう初詣

本当のことは洩らさぬ平和あり

お膳立させて世話好きらしく見せ

洗濯機の余裕で肌着またはがれ

島根県

榊原 秀子

新年へいまおだやかな幕があく

親馬鹿の証しと思う荷が出来る

親子橋何時もかかっている灯り

餅の数減らず老夫婦の初春がゆく

大阪市

柳原 静香

ともかくも笑顔で迎える初春の膳

帯締めて老いにも初春のときめきが

老いてなお女であつた妬心抱く

玄関の乱れも嬉し孫の数

松原市

北野 久子

初詣仕立おろしが浮き立てる

初夢へ八十年の虹を追う

起こされて夢の続きが惜しくなる

それからの妻は疑い深くなる

朗々の読経灯芯燃え盛る

本校の美談を話す朝礼台

元旦の御神酒は父の上げる役

三カ日過して母のお正月

大阪市

神夏磯 道子

庭の木も葉っぱ落してお正月

娘の晴着出して仕舞って満ち足りる

里帰り母に財布を覗かれる

二十四時今日へ区切りのペンを置く

河内長野市

井上 喜醉

親指の力へ押ピン身を任せ

退屈な散歩は犬に引っぱられ

裏口を聞いて正義感鈍り

宴会の途中で良心見失ない

岸和田市

福浦 勝晴

春の海去年のエゴを捨ててくる

文学に無縁の妻に諭される

「かあさん」と「あなた」のテレビに教えられ

癌でないことがわかつてうまいめし

寝屋川市

宮尾 あいき

梅の枝捧げ銃して満員車

御年玉が来たよと御年詞客へ孫

千円の福笹買うのに命がけ

風邪引きの鼻にも薰る床の梅

岸和田市

清野 こう

竹原市 小島蘭幸

ゴング鳴るたび男は火となりぬ

頂上でまだ考えている男

人間国宝まだ少年の夢をもつ

開き直ってからの男に隙がない

東大阪市 崎山美子

娘の幸をいのる老母の背の丸み

掛とりも手の届かない松の内

新妻のよろこびきざむ朝の音

よろこびに涙にまざる言葉なし

岸和田市 島崎富志子

屠蘇気分ふとラーメンが欲しくなり

子育ては三猿などで居ておれず

押しても見 引いても見たりで子を叱り

アデランスやつと自分の年になり

岸和田市 古野ひで

掌を合やすだけで満ち足る初詣

若松のみどりを心に初陽待ち

吹き溜り落葉のささやき冬の詩

燃えつきた筈へ残り火未練かも

兵庫県 藤後実男

仲居さんが女房と同じ名で酔えず

参道へ母の歩巾へ合す妻

あつかりと酒で別れて燃えつきる

真すぐに歩く母には強い風

竹原市 森井菁居

野心捨てた日からまあある日がつづく

酒徒ある日男はもういなくと思う

負けず嫌いな男が好きだ冬木立

矢印へ逆う人生だってある

東大阪市 竹中綾女

子の家の雑煮の味も妻の味

それぞれの孫に個性の出る遊び

襟巻きを娘から贈られ心満つ

通夜の席主人の通夜が甦る

今治市 越智一水

その松を石と根じめがひき立てる

老いてなお心に杖はもたぬ夢

元日も働く汗をおしまない

さけとろりとろり地酒で冬愛す

大東市 土岐トク子

一言のやさしさ白杖の子にあかり

息子を思う母の切なさ息子は思い

赤道を越えて南アの地図辿る

許すこと知って愛されることを知り

和歌山市 西山幸

便箋二枚とても重たい父の遺書

五百羅漢の一つに父の貌がある

生きる日へちちよ父よと米を研ぐ

背を丸め風に耐えてた日の父よ

八尾市 宮西弥生

寝ては喰い ふるさとのないお正月
金持ちの財布は眠るしか知らず
悲しみの酒は男の方が抱く
憶病な男の財布は空にせず

下関市 国弘 半休門

尾を振ってきた野良犬に住みつかれ
俺も亦天寿と呼ばれて柩にねん
息切れに「救心」老境を知る
爺々では居れん商談へ呼び出され

東広島市 高橋 鬼焼

給料の軽さになれた靴のちび
まだはける妻の若さよ赤い靴
金のいる話を聞かぬ補聴器で
明日からのページへ夢をいくつ画く

倉敷市 小幡 里風

すれちがうライバル男の風が吹く
得心の判をついてる但し書き
童心が天に昇ったシャボン玉
かずの子で話題をかえた屠蘇の膳

西宮市 若林 草右

つくばいの苔もめでたし初日の出
三猿は昔明治の物語

ラッキーマン今年こそはの年男
寒うおすなあ ナメクジ葉っぱの奥で会い

姫路市 植村 客遊子

接ぎ木した瓜の蔓にも茄子が生り
ご仏壇買うて転勤の旅終る
一番にはいる気になり募建てる

唐津市 新岡 回天子

元旦は予想外雨の賽銭箱
賽銭箱貧富の差等知らぬこと
初日の出登る気配に山の峰

和歌山市 垂井 千寿子

病院の顔役になる腑甲斐なさ
ボス猿に定年という孤独の日
のみを取る猿へ妬ける日も有って

鳥取県 森田 布堂

連鎖反応また銀行でわしづかみ
一票の義務に汚職のある怒り
手袋の片方がない発車ベル

岡山市 鈴木 九坡

恋女房今日はぼそぼそ金のこと
さりげなく笑うてみせることに馴れ
厨房の男子湯豆腐吹きこぼれ

枚方市 宮川 珠笑

腹立ちを母にぶつけてまだ独り
アパートに住んで愛車のメ飾り
骨休みしなはれ終日降りつく

貝塚市 行天 千代

元日の主役我が家に申二人
福引で飲めぬお酒を当てて来る
宝くじ最後の数字だけ当り

姫路市

大原葉香

日溜まりへ恍惚の顔集い合い
死ぬ事は一瞬生きる難しき
杖つけば出る愚痴神に預けとき

米子市

石垣花子

洋だこに正月の空乗つ取られ
えびで鯛釣られて祖父母嬉しがり
お立台陛下のお手はだるかろう

加賀市

細呂木魯木

後悔のない酒ついでの女事務
吾が人生譜面でみたい忙中閑
贈り物女心くすぐって

岡山市

岩道博友

嬉しい日心の道に邪魔がない
反省の言葉乾ぬ儘忘れ

明日がある気持で書く事まで残し

大阪市

神谷凡九郎

まだ馬鹿になれない私をじっと見る
双六の上りに馬鹿と書いてある
六十も間近まだまだ馬鹿に距離がある

鳥取県

金川満春

足触れて寝て老妻の高いびき

ワンカップ一つ適量古希の春
相性は凶で金婚あと五年

岡山市

花田たけ志

毒舌をさわらぬ神が孤独にし
話題ぎれテレビで継ぐ老いの夜

岡山市

直原七面山

また金に操られ
尼さんも読むポルノ

青森県

五十嵐操史

子守歌おとこに遠い過去があり
先発は筋金入りの口達者

伊藤茶仏

落葉掃く向うに一句読むゆとり
この辺で保守よさらばと言う世相
知名度も二の足を踏む全国区

億の金借りて票読む天の邪鬼
返信が胸につかえてはかどらず

浜田久米雄

金は無く暇ある余生あきらめる
晩酌の目盛りほろ酔うだけの量
ぬる燗がいつちうまいと酒の通
きょう中のプランに指を折って起き

禁煙の年月法螺のように増え

本田恵二朗

真心の彩濃ゆからず薄からず

引き際をつかみ損ねた苦い味
主婦の顔に戻ったとき倖せぞう
六感が動き過ぎてノイローゼ
模索三十年生甲斐の灯をみつげ

逢うたびにだんだん遠くなる人よ
独酌がいいよと男まだすねる
寒の入り情気を鞭打つ風の音
罪のない企み二人を深くする
くちびるを噛んで今日の歩を変えず

八〇年アフガニスタンの事始め
まかり出た過酸化水素震度3
松終る寝酒にたまも語り出す
ハイボール伴奏ひさめが降るようで

川村好郎

尼緑之助

心変りしたよに寒月雲に入る

恥を知る平行線が伸びている

しきたりに媚る言葉を隠してる

使い捨てにする顔色を読まれている

埋れ火に似た企みを持っていて
身構えても四角になれぬトマト赤

相続権抛棄の判は派手に押し

知恵おくれ銭箱抱いて放さない

擦れ違う話題のままで寝てしまい

阿部定のはなし温泉湯があふれ

音立てた頃の乳房のピンク色

かりそめの言葉が力となった過去

或る日の記憶夕陽と波の音

別れるときの握手の力信じたし

長生きをしてねとわかってきたらしい

右顧左眄する年となり恋哀し

社説にも俺の想いがそのまんま

老いかくすベレー帽とはわびしけれ

口数を減らし帰って欲しい客

孫が来て笑いが残る古い二人

俺が先 わたしが先と死ぬ話

正本水客

菊沢小松園

西尾栗

若本多久志

村田瓢太著
「紅華」
刊行記念句会

昭和55年6月6日(金)午後六時

会場 金属会館

柳話
兼謝題選

川村好郎
村田瓢太
「紅」
「サリーマン」 笠原吸江選
「手品」 西田柳宏子選
「孫」 菊沢小松園選

席題
会費

一題当日発表・各題二句
千円(句集と記念品呈)

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

若柳潮花

切り出せぬ慕情を茶のみのままで抱く

中川 滋雀

プラトニックラブ—いつまでも茶のみ友達として胸に抱きつづけられているひとは幸である。煩惱の支配するがままに振舞えるとしたらそれもまた素晴らしい愛であり恋であるかも知れないが、茶のみ友達として静かに美しく燃えつづけてゆける愛もまたより素晴らしいと思う。

移り住む町で見ている茜雲

高橋 夕花

どこで見ても茜雲の美しさには変りはないが待ち焦れた新居で見る雲のいろは夕花さんにとってどこで見る雲のいろより美しく見えたにちがいない。七彩の虹を見るように。

桶持って転任先の土を踏む

黒川 紫香

桶を持って出かけるとは面白い。誰しも転任と聞かされると、それが自分の出世につな

がるところでも、先ず人間関係が頭に来る。桶だけでは大丈夫か。蠶兎の用意は如何ですか。つまりいたとこから刺がまだ抜けず

岩田 美代

人間誰しも蹠きはある。ちよつとした心の隙間を吹き抜けてゆく風に蹠いたとしてもその傷口のいぬぬままで一生を終る人もあるだろう。傷口の痛む時は翺んで翺んで飛びまわつたら刺が抜けるかも知れない。屍を越えて咲けよと散るや花

林 瑞枝

親が子を励ます句であると思う。此の句を讀んだ時、霞乃先生に次のような句の有つたことを思い出した。「子等は星月は冷えゆくものと知れ」である。いつの世にも子を思う親の心がよく詠まれるが子供達はどうだろう。見張する猿はボスへの夢をもつ

川口 弘生

今年も猿年である。猿にも大きな夢があったとしても不思議ではない。雪空を眺めながら野天風呂にとっぷりとつかつている猿たちはどんな希望と夢を持っているのだろうか。ローン未だあり質草の家に住み

長野 文庫

結婚そして次は自分の家を建てるのが若いサラリーマンの夢である。社で退職金の前借をして頭金をつくりあとは銀行ローンで支払ってゆきが全額支払が済まない限り自分の家であつて家でない。つまり文庫さんの言われるように質草である。

からだじゅうそこ此所で叛旗ひるがえす

不二田一三夫

歳をとつてくると体じゅうが痛んで来る。医者に出かけると半日仕事である。足がいたむ、腰がいたむ、こちらから病気に叛旗をひるがえしたいと思うぐらいただ。

老婆がいっしょにいぶし銀に見え

小西 雄々

妻が良く見えるのは新婚時代と老後だと言ふことを耳にしたことがある。正に歳をかさねると妻が自分の分身であり影のようにも思ふ、そばに居ないと何となく不安に思ふ時がある。いぶし銀とは言い得ている。

幸せは柚子の香句う朝の風呂

香川 醉々

朝の柚子湯とは羨しい限りである。何となく柚子の匂いが鼻を抜けるように思ふ。陽がのぼりきつたら窓から見えるものは何だろう。

西行や芭蕉の旅に出てみた

若本多志久

病床にあつて毎月選句をしていられる多志さんの氣持が此の句にうかがえる。

私の好きな句

草抜いて根こそぎ抜いて別れよう

橘高 薫風

ささやかな老後風には風の道

正本 水客

あきらめのままできましたルビー婚

西尾 葉

入口に迷い出口をまた探し

菊沢小松園

西尾葉句碑建立

除幕式と記念句会

と き 昭和55年 5 月18日(日)正午除幕式(神式)

ところ 八尾市八尾木公園

近鉄八尾駅下車駅正面バスターミナル近鉄バス
瓢箪山行又は恩智行に乘車八尾木下車

一步出ずれば 我れ
旅人となる 心

水鶏庵 葉

祝 辞 記 念 句 会

川柳協理 中 島 生々庵

兼 題 川柳協理 中 島 生々庵

公 園 川柳協理 中 島 生々庵

菜の花 川柳協理 中 島 生々庵

水 川柳協理 中 島 生々庵

鶏 川柳協理 中 島 生々庵

旅 川柳協理 中 島 生々庵

五 川柳協理 中 島 生々庵

席 川柳協理 中 島 生々庵

會 川柳協理 中 島 生々庵

會 川柳協理 中 島 生々庵

費 川柳協理 中 島 生々庵

懇親宴 川柳協理 中 島 生々庵

句碑建立委員長 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

同 川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

川柳協理 中 島 生々庵

趣 意 書

この度、川柳塔同人有志の発起により、
西尾葉氏の句碑を八尾市八尾木公園に建てることになりました。

氏は川柳塔の副主幹として塔社経営、企
画に参画し又、同人選者として卓見をもち
昭和五十一年より日本川柳協会常任理事と
して活躍し今日に至っております。

なお、昭和六年七月阪大川柳会に入会し
て故麻生路郎先生の指導を受け、柳歴正に
五十年に達した喜びをも含めての企画であ
ります。

ついでには葉氏熟知の皆さんにも左記要領
でお力を貸して戴ければと存じまして御案
内申し上げます。

記

句碑建立基金

一金壹千円也 (お一人一口)

昭和五十五年二月吉日

句碑建立委員長

日川協理 中 島 生々庵
川柳塔主幹

▼基金窓口 丁542 大阪市南区鰻谷中之
町二〇 川柳塔社内西尾葉句碑基金係

または丁581 八尾市中田二丁目三〇二
高杉鬼遊方同係。

川柳 太平記 (22)

柄井川柳は始祖ではない

東 野 大 八

初代川柳にケチをつけるわけではないが、彼が世に「川柳点」と称せられた前句付一句建ての、実質的な「川柳」は、何も柄井川柳が発明したものではない。

柄井川柳が生れる十年前から立派に、刷り物になって存在していた。コロンブスが立てた卵は、コロンブスが実験したから彼の成功が手柄となり、世に「コロンブスの卵」の呼称が生れた。卵の方にすれば、卵として世に出た時から、立てば立てるような体質に出来上っていたまでのことである。

宝永年間（一七〇五—一〇）には俳諧万人講、千枚分銅、俳諧置炬燵、三国一、神子の臍など数多くのものが刊行されていた。明暦（一六〇〇代）以降、江戸には年間約一万人

の俳諧の刷り物が出ていたとあるから、前句付のいわば柳書の類も少くはなかった。たとえば俳諧寄太鼓、村雀、俳諧替独楽などには後世の柳多留収録の名句がすでに世に通っていたのである。

― 団扇では思うようにはたたかれず

（替独楽）

― 名の立ったついでにのばす後家の髪

（万人講）

― 金銀を只やるにさへ上手下手

（寄太鼓）

― 風呂敷に母の意見をたたみこみ

― 産む時は男の顔が鬼に見え
― 行つて寝よというが意見の仕舞なり

（千枚分銅）

― 目の上の皺は思案の寄せ所

（村雀）

― 去状の硯に水をさす妾

村雀の句は、かけ調で後世の狂句のいわばハシリとみてよい。蕪村をひき出した中興俳句のさし水役を果たした「五色墨」にも

― 島原の張かへ長柄一からげ 長 水

などは明らかに川柳である。殊に「俳諧つのぎり」難字なので平仮名にした。漢字は角偏に寫は、柳樽初篇が出た頃、すでに刊本され、江戸座版の立派な川柳本だった。

柳多留の編者呉陵軒可有が、柳多留初篇の編集に当り「あそこの隅、ここの棚よりふるとしの前句付のすりものを捜し出し」た時に、これらの俳諧書を積み上げ、そのうちの集句を初篇にどしどし入れていったわけで、「武玉川」も当然収録されていた次第である。昔も今も、ここが選者と編集者の意識の異なる点である。

出版編集者の顔が出たので、江戸時代の出版業について参考までに述べておこう。

江戸時代の出版業の隆盛は、寛文から元禄にかけてで、元禄二年（一六九二）の出版目録によると、七千二百種にも及び、俳諧、浄瑠璃、浮世草紙の類を加えると約一万点、一千万冊にも上る膨大なものであった。

慶長・元和までは唐本の輸入が一しお旺んで、この織訳・註脚等で、寛文に一切経の経

文(六三三卷)の翻刻がまずは出版ブームに火をつけた形である。

わが国の外来本のハシリは、上古の遣唐使ごろ中国からの仏書の輸入にはじまり、その影響によって輸入は増大、孔孟全書、朱子大全、朱子語類、老莊思学等が江戸儒学の基盤を作り、中国詩人の杜子美李白や唐詩によって万葉集や源氏物語の平安古典文学を生んだ。歴史書では前後漢書や左氏春秋、三国志等がある。

寛文から元禄にかけては、平民文学の発達と、町人社会活況は俳諧、浄瑠璃、浮世草紙の類で、そのベストセラーは西鶴本にとどめをさす。「元禄太平記」にいわく

「それ四書五経をはじめ、大和書の戲草に至るまで、梓の数年／＼にひろがり、已に吉野の桜木も切尽すかとあやまたる程に。すわみよ黄楊版の三重約興りしかば、桜が絶えしかと思わばさにあらず、黄楊はかえって桜木板貨の五割増じやという、(中略)筆工は一丁を一匁二分書に定め、僅かなる寸珍の筆料三百匁に及ぶ。然れ共、この版成就せし年、入目残らず取戻し、年々黄楊板を用いる事、西は対島に及び東は松島におよぶ」

出版業は朝廷をもつて京が本場で、ついで大阪であった。

「近年重版、類版御制禁たりといえど、京の版を大坂で重版し、大坂の版を江戸で類版する」「是等の本屋の仲間だまし、あたかも一路に三車を押すことし」(同)

桜の版木は黄楊(つげ)版木に較べ、目減りが早い。増刷の耐久力は印刷コストの点で黄楊にしくはない。今日の印刷技術からすれば鉛と銅ほど相違がある。板貨の点で五割高でも増刷のメリットの点で問題はない、それをいっているわけで、三車を押す好況に黄楊板が歓迎されたのも当然である。

「江戸繁昌記(寺門静軒著)の『書舖』の項によると、京、大坂の書舖の出店・出張所は文化年間には独立して六十三軒を数え、江戸本屋三組を構成したとある。

江戸時代の出版業者は、本屋・書林・書肆・書貴・書物屋・書物問屋とさまざまな名称をもつてよばれた。この中で儒学書・仏教教典・医学書・読本などの堅い本の書物を出すのを書物屋或いは書物問屋といい、浄瑠璃本や草双紙、浮世絵の類を刊行する本屋を地本問屋あるいは草双紙屋といつて区別していた。これは各本の種別毎に組合を作っていた。当時の本屋は、書型・冊数・丁数をはじめ、それらは読者に読みやすく親しみやすい、いわば売り口のいいスタイルをとっていた。俳諧

書一枚刷りは瓦板からのアイデアで、柳多留もその初めは、その綴り本形式をとっていたとみるべきであろう。

初代川柳が肉親の縁故で俳諧の道に入った当初の師立場不角も本屋であったが、柳多留の呉陵軒可有は、上野山下の出で、桜木連に属し木綿と号する呉服屋であった。

なかなか円満な人柄で、小言をきくたびにニコニコして「御了見、ごりようけん」つまり「ごかんべん、ごかんべん」の意を口癖にするのを自らも認め「ごりようけんあるべし」としゃやたものである。

柳多留出版を手がけた花久こと花屋次郎は、下谷竹町二丁目の出版業者で、号を雷成金屋管裏といった。表が五条天神の社殿があったことによる。

彼は柳多留を出すまで「俳諧つのぎり」やその他の俳諧雑本を手がけており、「俳風末摘花」も彼の出版である。文化十四年一月齡七十で没しているが、その他のことはくわしくはわからない。本屋には市井の学者が多かったが、彼は一陽井素外の門人で、なかなかの博識文才に富み、柳多留にも可有の死後、時折序文も書いている。

ともあれ柳多留は、可有、花久、川柳のトリオで、版木にのせる折は、この三人の共選も入っていた。



故岡田甫氏

俳風柳多留廿五篇研究

— (二八丁) —

506 色事に女房やきめうはんを入レ

青木「焼明礬」は、明礬を焼いて得る白色の粉末、薬用その他に用いられる。

亭主の浮気封じ。「焼明礬」の語に、女房の焼餅（しつと、ねたみ）の意が感ぜられるが……？ 何に入れたのか不明。乞御教示。

西原「月水を封じるために、ヨニに焼明礬を入れたのであろう。」

清「西原氏のいわれる事実ありや？ 疑問。

八木「簡単に「色をとめる」というのでは……」

紀内「「やきめうばん」の効用いまひとつ不明。

岡田「茄子の塩漬には、焼明礬を少量入れると、紫色にじつに艶よく漬かる。入れないと黄色く、まずそうになってしまふ。この茄子漬の秘方を女房が知っていて、色よく漬ける……という句。それを、いかにも性愛の〈色

青木 迷朗・西原 亮・鈴木 黄
室山 三柳・入江 勇・清 博美
八木 敬一・紀内 恒久・故岡田 甫

事」めかしく見せたところが、この句のミソ。

奥さんにお聞きあれ。この秘伝を知らぬ女性にはほとんど無い。漬物第一課の知識であります。

507 へらぼうも有るものしるこ餅をしひ

青木「へらぼう」は人の痴呆なるを罵つていう語。

「べらんめエ、女・子供じゃあるめえし、あまつたるいしるこなんて喰われるか」という上戸の鼻息のあらさ。

西原「賛。酒をしいるのはわかるが、しるこ餅とは。」

岡田「同。」

508 伊勢で髪おき高縄でハ袖とめ

青木「『川柳吉原志』の主題句の頭註に、

伊勢で髪置〓参宮に僧徒は附髪をなす。とある。「髪置」とは、僧侶が附髪をする事、

僧侶の伊勢参詣には、附髪するという慣例があった。

句意は、僧侶は伊勢参宮には附髪をし、品川岡場所に遊ぶ場合は、高輪の茶屋中宿で着換えてから繰り込むという意で、どちらも俗の姿に変えるという皮肉。

高縄で袖留をする不届さ

高縄まで祇尊の御弟子なり

傍二・7

二四・13

岡田「同。」

509 夕立に出るあどけない舟大工

青木「木のきれはしで作った舟を夕立がつくつたにわたすみ（地上にたまり流れる雨水）に、雨にぬれるのもかまわず、飛び出して浮べる無邪気な子供を天げさに舟大工といったのではなからうか。」

夕立と子供の句に、

子供から先へ取込むにわか雨

明四・満2

夕立に取込んでやる隣の子

明二・仁3

鈴木一賛 笹舟の事ではないだろうか。子供の頃よく降雨には笹舟を作った経験がある。何かなつかしさを感じる。

室山一笹舟説賛。

入江一同 なるほど、笹舟ですっきりしました。

岡田一同。

510 あかんべいさせて眼医者ハ療治する

青木一「あかんべい」は、赤目の転。指で下まぶたを引き広げ、裏の赤い処を見せて小児を威す戯だが、転じて事を否みさまたげる意に用いられる。

主題句は、眼医者でのスケッチ句。昔も今もちつとも変らないことがわかる。「あかんべい」の小児語をうまく句に仕立てたところが手柄ということか。

西原一賛。

通俗の釣りかんばんを目医者出し

二七・6

岡田一同

511 手や足でしいられたのハ四天王

青木一岡田甫先生著『川柳絵本柳樽』註に、頼光が四天王とともに、大江山の鬼の岩屋へゆくと、山伏姿なのに安心して、提

供した美酒をよろこび、鬼は頼光らに馳走をした。それが獣の肉ならいいが、人間の手足などだから、これにはいくら喰えといわれても手が出せない。

手や股で強ひるに困る四天王

安四・仁5

大江山炎の無いのを客へ出し

拾五・18

西原一賛 御伽草子の「酒吞童子」に、「今切りたるとおぼしくて、腕と股と板にする、中略」しむら四五寸押し切りて舌打ちしてこそ参りけれ」とある。

室山一同 謡曲「大江山」にはもちろんこういった場面はないので、西原説の、「お伽草子」や伝説によった句であらう。

紀内一賛。

頼光ハ一トきれやつと鶴呑ミにし

四〇・35

岡田一同。

512 暑氣見舞丸づけを十いせやくれ

青木一「暑氣見舞」は、暑中親しい人々同士が贈り物などして起居安否を訪問すること。

「丸づけ」は、切らずにそのまま漬物とすること、またその漬物。「いせや（伊勢屋）」は、江戸には伊勢出身者の店が多く、儉約なことで知られ、始末屋・儉約家の異称となった。

句意は、各番家の伊勢家が暑氣見舞に丸漬

を贈り物としてくれたということなのだろうが、「十」くれたとは何の事かわからない。

「十」という必然性、是非お明し下さい。

暑氣見廻行水をするごくこんい

二〇・36

井戸ばたでたてつけてのむ暑氣見舞

二〇・9

八木一「丸づけ」などは、だいたい人に贈るというようなものではないのでしょうか。そんなけななものを贈ったから「伊勢屋」なのであらう。「十」はたいした意味はなからう。

紀内一同。「十」の必然性不明。

岡田一同「十」で考えられるのは、「十六文」というコトバがある。青葉類がくさりかけると、今まで一つ一文以上に売っていたのを一山にし、「十六文」（つまり一山十六文）で売る。伊勢屋の漬物なら、十六文のナスがキウリに決まっている……という暗示。

513 ただくさを下女にうたせるおふかつて

青木一「ただくさ」は、七草のもじりか？

駄労解を示せば、勝手元不如意で、正月七草もなすな売りから求めず、野で摘んで来たものを下女に打たせたという事か。時は寛政改革の諸事儉約時代。

西原一賛。ただ（無料）の草の意ならん。

岡田一わずか一文のナスナも買えぬ御不勝手武家、しかし正行の行事とあらば、雑草でも下女にたたかせる……。

水煙抄

川村好郎選

福山市 桑田静子
エプロンの白さで明ける母の春
指先のしびれなだめる霜の朝
ひっそりと女ごころへ積る雪
シャッターを下して私の灯をともし
さりげなく帰る車窓に募る思慕
いつの日もボーカーフェイスの淋しさよ

大阪市 西出英子
喪の初春のせめてエプロンさらにする
地に這ってたんぽぽ冬に耐える知恵
暖冬を有難いとも不気味とも
神の国斯くかや雪の金剛山
寒風を試練と受ける日のゆとり

八尾市 田中紀美代
俄か雨気が張る人と傘の中
オクターブ下げて女 おんなの話なり
ストレスも掃き捨てている大掃除

初恋の人へサラリとした賀状
好意持つ人の賀状は別にする

米子市 桑原伊都

ご先祖の手垢もしみる家のつや
ひと言の波紋団地に風を呼び
利子だけで暮す数字を夢で追い
酔うほどに本音ぼつぼつもれてくる
千代紙の内裏に桃の彩を添え

竹原市 古田寛子

0歳の瞳の中にいる私
指を吸う知恵も授かり三カ月
児のほっぺちよつとつついてさあ仕事
薄氷破れる音をきく女

米子市 青戸美佐

言いすぎて波紋ひろげたあとの海
来年も流れにまかす日誌閉す
不気味さははらむ師走のばか陽気

祝宴のはずむ灯に老母の顔

名古屋市

越村 枯梢

馬鹿なりに夢は大きく狐を描く

ありがとう夕焼け空に呼びかける

冬至十日日足は春に向いていく

手の平にイニシャル書いて夜が更ける

島根県

角 耕草

初御空わが家の廂低いこと

満車札立てて初日待つ浜辺

正月も湯気の向うに母が居り

除夜の鐘撞き手が替ったなと思ひ

米子市

野坂 なみ

反対色よく溶け合つて老夫婦

円く住む事に疲れて孤に返り

猿真似で追う流行が潤歩する

亡き夫の時計病後の手に重い

和歌山市

坂部 紀久子

棚の上に上げた自分を見透かされ

良く云えば悪く云えばとややこしい

夢に出る人は別れたままの年

何時か子に語るロマンス温める

大阪市

内藤 ますえ

ふところの思案する間に又値上げ

熱帯魚水藻にからむ私語のあわ

粥をすすする程の恩給うらやまれ

物価高金の成る木が有るでなし

新宮市

辻 式

病葉のいたわり合うて吹きだまり

盃に妻の希いが伏せてある

一周忌もすまぬパンダに嫁が来る

弘法は猿のしくじり笑わない

寝屋川市

高田 てまり

猿年は値上げラッシュが待つていた

成人式少年Aと云う名が消える

日記帳白紙の裏に秘密あり

東予市

小山 悠泉

逃げ道を考えている煙草の輪

北風へ落葉ささやく吹き溜り

どの色に塗ろうか初春の白い画布

呉市

山根 里香

あともどりすなと背を押す春の風

万華鏡覗いて夢を追う少女

瀬戸の海箱庭にした本四橋

尼崎市

中谷 利美

ウエートレス呼ぶのになんで済みません

年金の暮しを妻と喰べ歩き

金策の夜更けを妻とつつく鍋

今治市

矢野 佳雲

這うてでも僕の選んだ道は行く

ライバルのくれたヒントは曲げてある

実印の棠枯くぐった色になり

高槻市

竹内花代子

お茶入れてテレビへ坐る三カ日

いろいろな猿が飛び込む年賀状

大晦日風邪もろて来た美粧院

出雲市

園山多賀子

せち辛さやさしい言葉蓄える

飯面など脱ぎたくもなる春うらら

心の翳りが女に詩を忘れさせ

米子市

雑賀美世

孫増えて編む手もはずむ冬仕度

母の香もこもる手編みの服届き

旅で聞く友の訃報に寝つかれず

諫早市

江副二牛

省エネを言うて便乗値上げくる

嵩高な歳暮野心もチラつかせ

秋風にせかれ枯れ葉も旅仕度

今治市

新居田胡頼子

SLのロマン津和野をひた走り

信心とは別な巷のクリスマス

省エネへ冬將軍のいやがらせ

兵庫県

野々口ゆう也

老の自我通せば四角い日々となり

老春を楽しむ暇あり金がない

老の意地せせら笑ってる冬の風

和歌山県

天満三千代

霜を踏む地下足袋が聞く冬の音

働いて土はポーナスほしがらず

これからの足跡つける道を選ぶ

富田林市

大道美乙女

過去はどうあれ善人と云うマスク

流れゆく川に木の葉は冬を知り

柏手を打って何から頼もうか

熊本市

有働芳仙

釣り草を殖やしただけの予算なり

新聞をたたんで今日へ向き直り

青空のコラムが欲しい社会面

広島市

すがかつこ

とまり木で無策の酒をあたためる

ひとりぼっちが好きなたしの静物画

知恵の輪の錆びゆくまに歳をとる

大和高田市

岸本豊平次

初詣去年の愚痴は捨てて来る

桃太郎引き上げるまで寝付かぬ子

ついて行く後姿で心知る

今治市

渡辺南奉

回転木馬昨日と同じとこを回し

嫁が来て勢力分布図が変り

一が好き無限の可能性を秘め

岡山市

串田句味地

沈む日を思い直した明るさよ

今日のしぐさもしやと思う夜のしじま

八十五の伴せ畑耕つ鍬たしか

広島県 砂田静佳

戸締りを忘れて大の宇寝れる里

何見たか熟柿枝からとびおる

梅一輪一輪だけの春を連れ

鳥取市 森田熊生

青春のシンボル笑う歯が白い

すねている瞳に雪が白すぎる

伝言のちがいがい小さな波紋わく

京都市 山本桐下

父の訃へ届かぬ毛糸針となり

明日は明日膳にくつろぐ夫婦箸

ホラ吹きの話たのしく聴いてやり

吹田市 藤原世史春

お角力さんだけは裸で賜杯うけ

納得はできぬ襖の音を立て

アフガンもイランもあらず愛猫と居る

旭川市 朝倉大柏

手作りの不出来が客に喜ばれ

僕だけは反対だったと後で言い

除夜の鐘心の闇に突きささる

元旦へ今年の画布の彩をよる

大阪市 大野武太

迷信と思う易書が手離せず

カラオケへ古い青春ぶつつける

富田林市 中村優

着飾った女の背中にあるカイロ

明日からまた頑張ろうなずながゆ

豊中市 満仲きく子

神仏へ合す掌内助へも合せ

受けて立つそんな気力も過去のもの

羽曳野市 麻野幽玄

三猿になれず出る杭めった打ち

入口も出口も痛む年になり

寝屋川市 福富隆子

大晦日今日もビーボーつづけざま

彼も老い同じ話を二度聞かせ

鳥根県 山根峰雪

勤務割カレンダーに書く弁当持ち

省エネの床で松竹梅香る

兵庫県 中田白李

一筋に生きて悔いない寒椿

三カ日娘の晴着を見て暮らし

大阪市 野田君枝

梅の花盆栽だけが見せてくれ

エプロンの新がうれしい内祝

大阪市 本多俊子

尾鷲市 渡辺伊津志

言い分をふて寝の床の裾で言い
忙しいなどは言うまい子は試験

島根県

木村 はじめ

鈍行も良いぞ車窓に山紅葉
けたの違う話を妻のさりげなし

鳥取県

石井 雅水

喪に服す元日静かに香をたき
木枯へ山茶花楚々と静もりて

岸和田市

原 さよ子

初詣で月も一緒に拝んどき
特売日寒風ついて走る主婦

和歌山市

堀 端三男

勝つよりも上手に負けた日のゆとり
さわやかな涙伝わす話聞く

岡山県

池田 半仙

年金の散財孫にお年玉
紅葉のまだ散り残る土佐の新春

大阪市

平井 露芳

アパートの一室それでも関白宣言し
省エネに天も味方し気温上げ

米子市

三戸 静絵

来年の抱負体をいとおしむ
旧姓を小さくそえて賀状来る

松江市

竹内 寿美

リバイバルも一度愛を確める

下り坂になって向うが見え始め

出雲市

石倉 美佐子

半衿の白さが憎い喪の女
少しずつ涙を解かす春が来る

大阪市

林 ひろ子

ややこしい話へびっくりだけしとき
寄せる肩雪も恥らい溶けてゆく

大阪市

岩田 八文銭

分けあえる時は貧しさ気にならず
山茶花が頑張ましようとなえて咲き

福原市

西本 保夫

休まない記録に挑戦しただけさ
もう定年無性に何か書きなぐり

唐津市

田口 虹汀

射程距離だが簡単にひけぬ指
娘の背をポンと叩いて送る母

唐津市

筒井 朴竜

厄除けの神も人災には勝てず
今年こそ翔んで悟空の雲へ賭け

唐津市

山下 勝一

手話たのし手話には手話の夢があり
童心にかえれ政治家わらべ唄

唐津市

浜本 久仁於

把手の片手を春が離させる
隣席がポツカリ空いた初句会

(田脈畑中氏急逝)

鳥取市 武田帆雀
鶴の軸掛けて九十二齡御満悦
油産国待てば日和の口をきき

和歌山市 湯川頼次
平静を粧い捨身の妻が居る
落書きの胸の黒板消してみる

大阪市 小谷清女
面識のないまま譲り合っている
来客に疲れ貰うた日の早寝

島根県 松本文子
未練雲茜の空を這いまわる
虫メガネ当てたらジェラシー見えてきた

京都市 松川芳子
里帰り「タダイマ」の声が胸を打ち
省エネへ祖母かたくなに歩を合せ

竹原市 古田鈍舟
色即是空寒水仙の香は無欲
中道も柳に風のゆらぎよう

高知県 山下登舟
求婚の話もれ聞く懐越し
飛石をならべたような冬の川

倉敷市 中島彩平
打つドラに霧が晴れゆく瀬戸の海
祭り酒飲んでもつれる獅子の足

東大阪市 三宅哲夫

万円札せめて昭和の初期ならば
忘れようとしても容赦の無い値上げ

鳥取県 羽津川公乃
見栄と無駄省けばチチと子が笑い
たくらみがあるのか今日は早帰えり

島根県 星野侑正
減反へ父祖の美田に梨を植え
娘の主帳めぐって論の沸く一家

香川県 田井教之
冬木立春を信じるたしかな芽
枯れ葉からから小春の風へ私語きぬ

大阪府 白石小雅子
告別式二日続いて三日目の不安
泉佐野市 大工静子

出雲市 板垣夢酔
持てぬから億の汚職に腹が立つ
鳥取市 中森葉士人

佐渡郡 高野不二
耐え忍ぶ詩を綴れと歳明けける
考えて見ますと断る気の返事

米子市 菅井未知
子を背負う猿に私の過去を見る
一冬は煮つめる味の深い鍋

島根県 岩田三和

大阪府	堀口欣一	乾しものがかわかぬままに年が明け
山口県	高崎雀声	退院の日は白らむのも待ちきれず
八戸市	島田昭治	通夜の席仏と飲んだことばかり
羽島市	伊藤静枝	手作りでくらしのテンボくいちがい
浜田市	佐々木裕	一期一会夫婦の耐える事多き
大阪市	岡田ふみ	人並に雑踏の街見て歩く
尼崎市	中辻千子	初空へ初老も忘れて背を伸ばす
大阪市	橋元美恵	人形の私貴方にネジ巻かれ
枚方市	藤本阿蘇美	寸鉄が妻に刺されて酒苦し
和歌山県	時田誠一	愛と夢のせて手作り父の風
倉吉市	野中御前	省エネがひしひし迫る兎小屋
唐津市	浜本義美	帰省客故郷の味が相伴する
唐津市	桑原掬治	おせち料理四日が犬のお正月

六法と真心互角な勝負する

出雲市 園山 栄
出雲市 吉岡 きみえ

郷愁も哀愁もなく若者里を捨て

倉敷市 大森 登竜

百八ツもろもろにひびく除夜

寝屋川市 立床 晴風

目の開かぬだるまに集金ことわれ

倉吉市 田民 碧水

お役人現ナマよりも顔で飲み

神戸市 久保 禎三

雪吊りの縄をゆるめて木遣り唄

大阪市 藤田 恒子

ボイコット出来ずソ連のカゼが来る

★

大洲市 米沢 曉明

隠し芸用意してたに出番なし

明治もう古い大人になりました

パスの出るまでのパチンコよくはいる

受験の子へしかと薬とお守りと

岐阜市 市川 鱈魚

終身刑夫婦鎖でつながれる

涙一つ一つ男が道に敷く

くくり髪泥よりぬけぬ夫婦箸

貞女とはトンボめがねが承知せず

深爪を女うっかり二月の陽

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

三井 醉夢

一粒の種を大地は見逃さず

坂部紀久子

一九八〇年、末広がりの八の字を信じたい
と思う矢先、電力から初まるめじろ押しの物
価高のニュース。主婦としてのため息はしば
らく置いて、この天地の恵みを天上段に構え
て、格調高くうたいあげている句と向き合っ
ています。地球上で醜い争いが絶えない時、
大地は一粒の種に情けを下さない。
「一粒の麦もし死なずば」のジツドの自叙
伝から「ヨハネ伝」におもいが広がって、じ
ばし豊饒な気分にさせてくれました。

一行も汚職に触れてない伝記

有働 芳仙

男の野望は、金、地位、名譽へとエスカレ
ート、そして伝記を書きたがる。貧農に生ま
れ粒々辛苦、今日の我あり……と。まさに男
の花道は感涙ものだが、得てしてこの種の伝

記、まゆつばの類が多い。老練な川柳眼が、
さりげなく句に一矢を放つ。栄光の陰に汚職
ありか嗚呼。

蝶々を飛ばしてみたい春を描く

高杉 千歩

いつもスケッチブックを片手に旅をする友
人がいる。まずは正確な写生からと丹念にス
ケッチしていたことを思い出す。

この作者も日本画に御精進とか。絵のことはよくわからないが、キャンパスに春を描き
乍ら、そこに幻の蝶を見たのは作者の強烈な
個性であり、この句にいのちを吹き込んだ。

森英恵の蝶もあれば、私の描く孤蝶もある。
作者の蝶は揚羽蝶かもんしろ蝶だろうか。

やるだけはやったと思う深呼吸

森田 熊生

何をどうしたのかとせんさくは無用、他人
から見れば、笑止千万な些細なことであつた
かも知れない。しかし彼の眼には露ほどの悔
もない。ヨガの本によれば、呼吸の行法は人
格を改造する程の秘めた力があるそうなの。
うまい句より、生まれた素直な句の方が、
心に響く時がある。

風あがれあがれお前には空がある

満仲きく子

漢の時代、韓信が敵状偵察につくつたのが
風の起源と聞く。とまれ風あがれは郷愁につな
がる。寒風に悴んだ子供たちは、大きな夢を

ふくらませて風糸をのばしてゆく。年々歳々。
風も住みにくい世の中になり、新幹線泣か
せの風の話もある。それでも地方にある風あ
げの行事は、大切に残して欲しい風物詩の一
つ。風よおまえはあがらねはならぬ、人生に
疲れ初めた大人達の為にも。

饒舌過ぎて紙面残り少なくなりました。か
け足の鑑賞を御容赦願います。

アンテナを立てて女の立ち話

西出 英子

アンテナとは面白くやがて悲しい。
神の妙お乳おしめを泣きかける

古田 鈍舟

赤ちゃんは天の子、いい匂いのなつかしさ。
幾山河越えて言葉のまろいこと

細川 幸代

まるい言葉と感じるのは情のあるひと。
童心をかえてくれる赤とんぼ

辻 式

三木露風の赤とんぼを歌いましよう。
汚職には縁なき歳暮配りおえ

大野 武太

ささやかな歳暮に心がこもっているのです。
白鳥が来て湖も冬の貌

小山 悠泉

瓢湖の白鳥を夢見ては今年も冬ごもり
冬厳し庶民に春はまだ遙か

浜本 義美

冬来りなば春遠からじと信じることに致し
ましよう。川柳のあしたの春を折りつつ……

愛染帖

橘高薫風選

霏々と降る白一色の曼陀羅華 青森市 工藤甲吉
 酒飲めばひとり破滅型となる 堺市 伏見茂美
 ふるさとの安らぎコケコッコーを聞く
 嫁がしてさびしき酒の名を探す 大阪市 川口弘生
 ハイハイと母の電話も聞くのなり
 かわたれに猿石の喜怒哀分かぬまま 和歌山市 西山幸
 呼吸してただけの違ひで暴洗う
 凍天に燃えてるあれは父の星 八尾市 高橋夕花
 勇者いま還りぬ白い落椿
 再会に氷雨の町はゆるむなり 大阪市 河野君子
 階段をすこしずつ登ってきた新居
 冬眠の老父の蘇生へいちごの朱 大阪市 小出智子
 風は春身の内流るせせらぎよ
 風花の舞う日を父の忌と憶え 和歌山市 松原寿子
 風のある町で拾った空の財布
 訴状より水の流れへ添う花弁

道ならぬ逢瀬舞台のそらごた 高知市 西川富恵
 胸は雪灯りひとつの未だ見えず
 煌めくやいのち繋がる娘の髪
 嘘を云う顔からえくぼ消えていた 尼崎市 黒川紫香
 爺ちゃんにお子様ランチあげたいね 町田市 竹内紫靖
 終盤の見どころ女流棋士が燃え
 完全主義おのが肥満はかえりみず 倉敷市 田垣方大
 ハイヒール颯爽としか歩かせず
 カーネーション上手に咲かせ父母がいない 大阪市 白石潔
 新調の服で出かける定退す
 これからの日々大切に定退す 羽曳野市 麻野幽玄
 ロッキングチェアお腹の子と揺れる
 歳と名を聞くまでに父折れてくれ 鳥取県 鈴木村諷子
 気違いと思や凡夫と見られとる
 既製服着て演壇で胸を張り 大阪市 藤森小雅子
 冬ざれの木々に荒野の死を想う
 ホモ・サビエンス檻から猿に覗かれる 今治市 月原宵明
 寒気团迫り夫婦も乾き切り
 転轍のように人生変えようか 倉吉市 奥谷弘朗
 教養の割にゆとりが見当らず
 有る奴が太れるように世は動き 兵庫県 遠山可住
 れつきとした野良犬大いばりで逃げる
 決め球があるから遊び球が生き 堺市 高橋千万子

老いてまだ正月が好き子がもどる
 風船の自由うらやむ奴風 岡山県 嘉数千代香
 灯を消せばわたし一人の風となる
 金婚のプランへ湯豆腐が煮える 京都市 山本規不風
 丸坊主にされた子の目にかるうい雲
 思い切り甘えを云わせている易者 米子市 野坂なみ
 梅一輪ご縁いただき候て 和歌山市 湯川頼次
 嬌声に女の仮面見たようで 鳥根県 飯塚虎秋
 年金でのつべらぼうに似た暮し 大阪市 土屋雅洋
 案じてる様な顔して雀来る 和歌山県 時田誠一
 馬鹿でいる時間人間らしくなり 名古屋市 大林曲ん手
 盗人の庭で野仏撫然たり 京都市 山本桐下
 活け花が枯れ公平な瞳に戻り 寝屋川市 柴田英千子
 魔を払うひいらぎにある花の季よ
 自己放棄白雨のようにおとずれる 今治市 越智一水
 恥じながら一枚めくった新暦 名古屋 越村桔梢
 悔い多く日々好日の日記帖 倉敷市 水粉千翁
 止り木ががたがただかたねと離婚 東大阪市 三宅哲夫
 私にくるまで激動とはいわず 川西市 戸田古方
 前山北海

開拓の墓風化して耕地の隅

大阪市

僕の義歯日曜大工でつくろうか

倉敷市

一面の記事には何処か嘘があり

米子市

誕生の意味を問われて飯を乞う

島根県

一滴の水に絵皿がもえる彩

島根県

図面引くおとこが抱く淡い危惧

島根県

先生へ大半お返しをした英単語

島根県

親友と思うにメロソウすく切り

高槻市

四季のない浄土に四季の花が咲く

小松市

待ちわびる女に東も西もなし

岡山県

朝帰りを九官鳥に迎えられ

牧方市

温室を残し枯野が暮れ尽きる

和歌山市

コツコツと貯めてスカツと使う旅

神戸市

雪吊りの縄ゆるめれば木遣り唄

東大阪市

年玉を貯金する孫使う孫

和歌山市

老いたなとふと思つたが口にせず

和歌山市

糞虫の一日時計の振り子かも

島根県

大野 武太

井 春日

西 雄々

みどり

砂 白汀

原 秀子

田 三和

柳 潮花

馬 場魚山

直 原七面山

宮 川珠笑

内 芝としよ

久 保植三

竹 中綾女

坂 部紀久子

福 本英子

堀 江正朗

柚子とろりとろりと姑の香を煮つめ

島根県

車免許をやつと手にすりや省エネさ

唐津市

春霞龍馬が睨む土佐の沖

唐津市

自分への土産をひとりほくそ笑み

京都市

佳き旅立処女雪へ画くシユブールで

和歌山市

過去形に惚れた女の演歌聞く

竹原市

コンタクトレンズ晴る間に合わせ

唐津市

来る年へ日本みそぎのみそか雨

萩屋川市

肩車隣の堀を越えた毬

八戸市

影武者の役で定年きてしまひ

三重県

はんのすこしとびらを開けてた女街

鳥取県

北国の春待つ唄で炉を囲み

米子市

書初めの孫へ家族で審査員

富田林市

ボス猿がどこもかしこも多すぎる

浜田市

共稼ぎ妻には妻の預金帖

大田市

口下手でよし理解する女房居る

倉敷市

満員車釣り革で聞く裏話

兵庫県

堀 江芳子

筒 井朴竜

浦 野和子

古 谷節夫

宮 本義美

宮 尾あいき

小 泉紫峰

坪 田冬花

和 井観洋

井 上柳五郎

岩 田美代

佐 田裕

木 蘭

小 幡里風

野 々口ゆう也

冷凍魚海に帰れぬ貌をして

八尾市

猿まねの関白宣言続かない

唐津市

射程距離だが簡単に引けぬ指

島根県

総理の座ゆずって我家も孫と居る

唐津市

省エネをあざ笑うごと寒波くる

大田市

命ある限り絆と言う鎖

今治市

翔んだとて雲はつかめぬ男です

出雲市

狙は嫁と姑の馴れを知る

青森県

船酔と比較されてる千鳥足

倉敷市

思い出は遠い彼女と吊し柿

萩屋川市

口止めの釘はすこしきつく打つ

奈良市

Gパンの娘も若松へかしこまり

岡山県

一日を光る日にする髭を剃る

今治市

コースから外れたとこで面を脱ぐ

愛知県

鈴なりの熟柿に雪が容赦なく

鳥取県

燃えつきた焚火に過去がおいである

広島県

年忌終え亡夫の帰りの遠くなる

大東市

宮 西弥生

田 口虹汀

清 水一保

桑 原掬治

江 城修史

渡 辺南奉

園 山多賀子

五十嵐 操史

斎 藤通風

江 口度

森 田カズエ

桶 岡正之

矢 野佳雲

池 田香珠夫

羽 津川公乃

砂 田静佳

土 岐トク子

米子市

新築を祝つてみじめさ持ち帰り

大阪市

兎小屋脱皮の空港花盛り

高知県

冬の川芦の折れ葉を水がうつ

室戸市

恋一つ捨ててルージユの色を替へ

鳥取市

省エネの背中に黒い記事が染み

米子市

粧つて奢つてみてもひとり旅

鳥取市

ここで泣くそんな名演技はできぬ

平田市

頼ずりをする気の孫へ髯を剃る

岸和田市

冬の雲亡母の苦節の涙かも

羽曳野市

雪一升金一升のスキー場

八戸市

根性と借金残せし父父恋し

山口県

美術館の裸婦像の前に立つ女

西宮市

死ぬまで女は晴着に金を惜しまない

兵庫県

子育てに母のリズムはくすすまい

京都市

天平の贅天平の色を持つ

和泉市

隙間風二人で張つて夫婦部屋

和歌山市

還暦が過ぎても僕が見つからず

出雲市

菅井未知

気付かれぬ服飾母の形見など

和歌山市

猿芝居の猿の姿を笑えるか

宝塚市

久方に子と酌み交わす春の酒

大阪市

霜柱祈りの道へ音きしむ

鳥根県

母にだけ見せたい涙駅へ皆つ

岡山県

人に言う主義を或日は逆に変へ

和歌山市

元旦の朝の空気の調味料

貝塚市

申の年でも意地悪じやない私

大田市

いつの間に姑の着物が似合いたし

香川県

金も名誉もいらぬ男のプロポーズ

島根県

あなたとの語りは未来の設計図

尾鷲市

亡骸を吊つように蟻が曳く

米子市

嫁した娘と語り明すも二カ日

岸和田市

教え子の賀状に心救われる

羽咋市

このおれを尾行している俺卷かれな

今治市

バーゲンでサンタの夢を買いあさり

兵庫県

咲きかけた花なら誰にも愛される

出雲市

剣道具つけて靴はく素浪人

板垣夢酔

受話器までうつつて来そうな咳きこえ

米子市

灯を消すと今日の時間が立戻り

旭川市

三狼で暮らそう私も年女

岸和田市

寒雀よくもそんなにふくらんで

豊中市

ブーツにもししサイズがあるらしや

枚方市

家計簿の影に良妻奮起する

鳥根県

久しぶり似合う和服で神詣で

唐津市

夜のしじまおもい直した処世術

岡山市

旅便りポストへ落ちた音たし

倉敷市

受験票神棚にあり問いを解く

唐津市

明日と云う言葉に人は騙されて

唐津市

福の神当てが外れた初詣で

倉敷市

保護もされ邪魔にもされて狼が生き

鳥取市

逆行か耕地整理のブルの音

岡山県

帰つても来ても嬉しい孫の宿

鳥根県

生きているならこそ夫の大あくび

兵庫県

☆投句先

★

千560

豊中市中桜塚三千目13

15

桶高薫風宛(ハガキに三句以内)

桑原伊都

朝倉大柏

清野こう

満仲きく子

藤本阿蘇美

大野酔夢

新岡回天子

串田句味地

中島彩平

岩崎実

山下勝一

田民碧水

石井雅水

池田半仙

木村はじめ

円増貞子

麻生路郎選

評 古川柳の味

八木摩太郎清記

貰ひ乳にかはる砧の力過ぎ

乳呑み子を養ひて女房に死なれた男が、砧を打っている内儀のところへ乳を貰いにゆく。またのましてやって下さいと子をその内儀にあずける。そして貰ひ乳の気がねから、内儀が乳をのませて呉れている間代つて砧をうつのであるが、男ではあり又慣れないこととして、又しても力が這入りすぎるのである。

物さして昼寝の蠅を追つてやり

子の寝たままに縫い物をしてながらも、喧るさくたかる蠅を物さして追つてやる母親の心遣い。

持ちなさい女は後にふける者

「あれはまだこともじやないか、世帯も何も持てやしないぜ」と云えば「なあに、女はあとでふけるものだ、もらつて置きなさい」とは仲人のよくいう言葉だ。

もつと寝てございによめは消えたがり

この句、嫁姑対の序曲である。花嫁の初々しい姿が、その家庭へ明るい光を投げた事実、は姑にしても大きなよろこびであるから、これを姑の皮肉と見るのは少しく酷だと云えよう。何れは息子の中に挟んで嫁と対峙し、嫡を削るではあるうけれど。

もういくつあがると雑煮聞きあはせ

お雑煮はかしは沢山煮てとるところになつても困るし、残つても困るので、一々数を聞合せるのだ。

約束をたがえぬ紺屋哀れなり

紺屋の明後日という言葉が生れたほど、紺屋の約束はあてにならない。あさつてが来れば又あさつてなのであるが、これは又約束の明後日を間違ひもなく「ヘイヘイ出来て居ります」という。いかに閑な紺屋さんであるかが窺われるので、一種の嘲笑を浴びせたのである。

八瀬小原さきいに牛をしかりと

いくら京言葉がやさしくても牛を叱るのに「もつと早うお歩きやしたらどうですえ」とも云わないだろうが、他国に比べては遙にきれいに叱るのである。

病み上り喰はずにおくやうにいひ

食欲地獄の悲惨な滑稽を詠んだ句だ。眼は鼠のように光っているし、髭は葱畑のようにまばらに伸びている。斯うした病み上りにとつては、色気よりも食ひ気である。又しても胃力を無視して食欲を挑む。若しこれを連うものなら、喰べるものも喰べさせないやうに訴えてやまないものである。

やはらとりかういたしたらどうなさる

黒帯の野暮さ加減を髣髴とさせている。

「イタタタ」と手をぬじあげられているのも面白。

指二本額へあてて下女は逃げ

格気深い奥さんに叱られますと云わねばかりに下女が額へ指二本あてて逃げて行つた。指二本は角をあらわしたものの。

よく寝れば寝るとて眠く枕敷帳

泣けば病ではないかと案じ、すやすやとよく寝れば死んでいるのではないかとぞいて見るのが親ごころ。「アア息をしてよ」と云つてホツとするのも親ごころだ。

よつぽどの間かと昼寝は目をこすり

ひる寝というものはどの位眠つたか一寸見当がつかぬものだ。フト眼をさました日がもう傾いている。きまりが悪いので眼をこすりこすり「余程寝ただろうね」という。その実「イイエ、ホンの一寸の間ですよ」と云つて貰ひたいのだ。

世を捨て、先づ淋しい膳の上

あくせくとして僅かばかりの金儲けをして来た莫迦らしい。いずれは死ぬ身だ。そんなことを考え出している人世も終りに近い。晩酌は一合、あては、このわた、これでよいのかと思ふは、淋しさがひしひしと追つて来る。凡人は何処まで行つても凡人だ。

よく締めて寝ろといひく盗みに出

世の中にはオヤと思うことが多い。考えれば考えるほどおかしい事が多い。盗人のくせがあり、よく締めて寝ろと云い置るところに矛盾は、その矛盾が人生でもある。

蓮根はこゝろを折れと生れつき

蓮根にはところ／＼にくびれがある。それをこの辺から折れというように生れつき出来ているのだというように観察したのである。

料理人氣のへる程にくづを出し

よいとこどりで、刺身を煮る。煮つけにす。アラはアラ煮きにする。さかな一匹もたせても料理人とうきものは、いろいろな使い分けて、ホンの少しばかりしか屑を出さぬので、気のへるほどにくづを出して云つたのだ。

実にせぬくせに藪医のなんのかの

実際に手おくるせの病人もある。どうしても癒らぬ不治の病人もある。寿命だと思われるものもある。それなのにウツカリ死にでもしようものなら、藪医者だ、藪医者だと罵るのが人情だ。そのくせ癒してやつても碌に謝れぬのである。
(おわり)

おとなのひな祭り

女性作家の プロフィール

・ 同人特集 ・

年齢はか不詳の方もあるが、野暮な詮議だ
ては淑女に対して礼儀を失つことになる
から敢えておたずねしなかつた。――資料は故
清水白柳氏の「川柳家の誕生日」と「同人申
し込み書」からである。

不二田一三夫

左端の数字は同人に推薦された
年月・雅号は推薦者（敬称略）

有田とし江（53年8月―由多香・貞山）
旅館業・大正8年9月20日生

安藤寿美子（52年6月―古方・凡九郎）
主婦―第9回川柳塔賞受賞

石垣花子（48年11月―栗・千代・瑞枝）
主婦

泉谷サヨ（52年12月―好郎・史好）
主婦・明治43年3月7日生

市川きよゑ（54年11月―水客・紅月・岳
詩・客遊子）
会社員・大正14年1月14日生

岩田美代（54年11月―水客・紅月・岳
詩・客遊子）
理美容営業―第10回路郎賞準
優秀作―第11回路郎賞―第13
回路郎賞準優秀作・大正10年
11月生（川柳雑誌社不朽洞会
会員）

内芝としよ（49年10月―好郎・太茂津）
主婦
主婦・大正7年11月11日生

浦野和子（53年9月―太茂津・千寿子
・武雄・与史）
主婦

小川佐知子（44年12月―好郎・太茂津）
主婦・昭和7年2月生

納糸葉（53年6月―栗・鬼遊・酔々）
第11回川柳塔賞準優秀作受賞

太田良子（開業医・大正12年7月生）
（川柳雑誌社不朽洞会々員）

大森孝華（46年8月―生々庵・明朗・
白汀）
会社役員・大正11年生

小笠原有里（41年1月―一水・一三夫）
齒科医院・大正14年生

小野克枝（44年11月―好郎・三林
坊・薫風）
化粧品他卸業・昭和5年2月
生

竈島総甫（華道関西末生流家元・（53年3
月―牧人・小松園・一三夫）
商業・第6回川柳塔賞準優秀
作―明治44年5月20日生（48
年7月―久志良・栗・小松園）

嘉数千代香（45年6月―茗人・貞山）
食料品店・昭和1年生

川崎秋女（43年6月―惠二朗・十九平）
主婦・昭和7年6月15日生（50
年7月―小松園・与呂志・敏）

川端柳子（43年6月―惠二朗・十九平）
主婦・昭和7年6月15日生（50
年7月―小松園・与呂志・敏）

神夏磯道子（53年9月―文秋・智
子・君子・一三夫）
主婦

北野久子（53年9月―文秋・智
子・君子・一三夫）
主婦

行天千代ぎょうてんちやう 藥品店・明治41年10月7日生。
(49年7月―春葉・一三夫)

久米奈良子くめならこ 書塾・昭和2年4月22日生。
(40年10月―生々庵・二三夫)

黒田真砂くろだまさご 服飾店・大正12年5月生。
(46年1月―好郎・小松園)

小出智子こいでともこ 主婦・第4回川柳塔賞・第8
回路郎賞準優秀作受賞・大正
15年10月生。(46年1月―文秋
・一三夫)

河野君子こうのきみこ 主婦・第4回川柳塔賞準優秀
作・大正12年10月生。(46年
1月―文秋・二三夫)

小林トメ子こばやし 主婦
(41年1月―生々庵・一三夫)

榊原秀子さかきばらひでこ 主婦・第5回川柳塔賞準優秀
作・(48年7月―葉・明朗・白
汀)

坂口公子さかぐちきみこ 主婦・(54年5月―大茂津・
千寿子・武雄・与史)

崎山美子さきやまよしこ 主婦・(53年2月―好郎・小
松園・肖二)

佐伯越子さへきえうこ 主婦・昭和3年11月14日生。
(52年7月―葉・薫風・花子
・瑞枝・千代)

島崎富志子しまざきふしこ 主婦・昭和6年生。(53年6
月―操子・武助・一三夫)

柴田英壬子しばたえみこ 主婦・会社員・大正15年6月
2日生。(53年1月―好郎・
ゆきをを)

杉浦婦美子すぎうらふみこ 主婦・(53年11月―多久志・
薫風・メ女)

鈴木かつ子すずき 主婦・(52年1月―甞光・静
水・小松園)

清野こうせいの 主婦・大正10年生。(53年6
月―操子・武助・一三夫)

高橋幸代たかはしさいちやう 呉服商・昭和19年2月27日生。
(49年2月―生々庵・操子)

高橋千万子たかはしちまこ 主婦・明治42年1月生。(43年
1月―好郎・笑痴)

高橋操子たかはしみさこ 呉服商・明治44年5月生。(川
柳雜誌社不朽洞会々員―句碑
「久米田寺」句集「千亀利」)

高橋夕花たかはしゆうか 主婦・昭和3年7月7日生。
(49年2月―葉・智子・一三夫)

竹中綾女たけなかあやじよ 元教員・明治40年12月生。
(44年5月―白柳・一栄)

竹浪浪寿たけなみろうじゆ 主婦・大正14年生。
(43年2月―味平)

谷岡芳枝たにおかよしえ 主婦・第6回川柳塔賞受賞・
大正10年9月16日生。(54年9
月―薫風・一三夫・白汀)

垂井千寿子なるいちすこ 主婦・第12回路郎賞準優秀作
受賞・(49年2月―好郎・葉・
太茂津)

津守柳伸つもりりゆうしん 理容業・昭和7年10月生。(48
年9月―摩太郎・小松園)

天正千梢てんしやうちしよ 和洋家具商・(40年10月―生
々庵・一三夫)

梅みどりうめ 主婦・大正2年10月9日生。
(49年2月―薫風・葉・水客
・明朗・白汀)

土岐トク子とき 主婦・大正5年生。
(43年3月―生々庵・二三夫)

中島小石なかしましようせき 中島診療院・明治40年3月生
(川柳雜誌社不朽洞会々員―
句集「生々樂天」)

錦織文子にしきふみこ 元教員・大正2年10月9日生
(49年2月―薫風・葉・水客
・明朗・白汀)

西山幸にしやま 会社員・第11回川柳塔賞受賞
(52年12月―好郎・大茂津)

野坂つき子のさか 主婦・昭和15年8月生。
(43年12月―摩太郎・笑痴)

林春栄はやし 主婦
(50年7月―操子・一三夫)

林瑞枝はやし 主婦・第10回路郎賞受賞・大
正14年8月生。
(44年7月―日満・茗人)

福田保子ふくだやすこ 団体職員・昭和20年12月13日
生。(53年8月―日満・由多
香・洋々)

主婦・大正7年11月生。
福本英子 (54年5月—太茂津・千寿子・武雄・与史)

主婦・明治41年3月生。
藤岡花梢 (川柳雑誌社不朽洞会々員)

会社社員・大正15年生。(48年7月—庸佑・奈良子・一三夫)

主婦。
伏見茂美 (44年7月—好郎・笑痴)

主婦・明治45年5月生。
藤村女 (川柳雑誌社不朽洞会々員)

主婦。(54年6月—操子・武助・一三夫)

主婦・第7回川柳塔賞受賞。
堀江芳子 (大正10年10月生。(48年12月—緑之助・明朗・水客・薫風)

鍼灸・第14回路郎賞準優秀作受賞—大正5年1月15日生 (49年4月—弘生・春果)

主婦・第14回路郎賞受賞—昭和19年3月6日生。(52年12月—好郎・太茂津)

三井医院・第7回路郎賞準優秀作受賞 (41年1月—阿茶・白柳)

主婦・大正4年8月生。
光好陽子 (川柳雑誌社不朽洞会々員)

一分間の柳論

全力投球をすれば三振もとれるであろうし又打たれても悔は無い筈です。川柳にもそれが言えるのではないのでしょうか、山内静水さんから何時も聞かされている麻生路郎先生の言葉「君、川柳は下手でいいんだよ川柳は情熱だよ」がそれを如実に物語っています。下手でもいい全力でぶっつかれば何かが開けてきます。とはいってもそれだけでは足りないものがあります。博識です。広く色々なことを知ることが大切です。書物を読む、

時 広 一 路

足で歩いて目で見て色々なことを知り経験を積む、それが豊富な知識となって作句に選句に役立つのではないのでしょうか、私達はもっと勉強しなければならぬと思います。それと現今の川柳誌には淋しい句が数多く見受けられます。淋しい句の方が作句し易いものですが、もっと明るい句、ユーモアの有る句を作りたいものです。日本人にはユーモアが足りないと言われています。考えて見るべきではないかと思えます。

主婦・明治44年3月生。
宮尾あいき (40年10月—文秋・一三夫)

服飾デザイナー—昭和9年3月生。(46年4月—好郎・一三夫)

元看護婦長・大正6年1月7日生。(49年4月—春果・笛生)

主婦・第6回路郎賞準優秀作受賞—大正13年1月生。(44年7月—日満・茗人)

主婦・大正7年10月25日生。
柳原静香 (48年6月—文秋・一三夫)

女医・明治30年5月生。
山川阿茶 (川柳雑誌社不朽洞会々員)

主婦。(54年11月—無鬼・薫風・女)

主婦・大正2年10月生。
吉野富江 (49年12月—好郎・太茂津)

元教員・第14回路郎賞準優秀作受賞—明治42年9月生。(46年9月—花梢・摩天郎)

(55年・2月現在)

本社句会の

題について

今月の本社句会の兼題「角」に対して、ペテラン選者のA氏とB氏から、

「角は」かど「かすみ」か、それとも「つ」のか、作る方も選者も一本に絞れないので困るのではないか。こういう場合は「かな」を打ったほうがよい」とこ注意を受けた。

が、C選者は、「ばく個人としては、いろんな「角」という字が見られるので、「かな」を打たぬほうがよい」ということだった。

昨年「雑唱」という題が出たとき、「十数冊の辞書を調べたが「雑唱」というのはない」

また「雑唱」とは、「何のことか?」と、地方の二人の方からおたよりを受けた。そこで権威のないはなしだが急提題を変えたことがある。

その後、題詠ではないが、ある俳句の雑誌に「雑唱」という文字のはいった句を見た。課題吟では作りにくい雑詠なら作れるというところかも知れない。

ここ数年前から本社句会の題は句会部の人たちから出してもらっているが「川柳雑誌」

時代から、ほとんど故路郎先生や葎乃先生に見ていただいて題を出してきた。その頃「エレガント」というコトバが流行していたので早速使うようにしたが、路郎先生から、むずかしいということにボツになった。だがその翌月、故岡橋宣介先生の「せんば」で「エレガント」が兼題として使われたことがある。

その頃、若柳潮花氏選で「ボディビル」が兼題に出た。流行語きらいの路郎先生だがこのときはOKして下さった。

川柳塔になってから「ギョーザ」という題に対して相当強い風当たりを受けたが、故阿相すゑ氏の巧選で事なきを得たことが忘れられない。

「川雑」時代から兼・席七題のうち「ひらがな」が「一題「カタカナ」が一、二題、なるべく出題するようにしてきた。

地方の句会に、これは?とおもつような奇抜な題によくお目にかかる。そこで、「それからどうなった?」というような題を出してみたいと思ったことがある。若い男女の仲でもよいし、やつと就職した会社が倒産になったことでも「それからどうなった?」の句材になるように思つたからである。

「堀」という題に「芋を掘る」というのがあった。句者も選者も文字を読み違えたようだった。句者も選者も文字を読み違えたようだった。

よその句集に拙句が活字になったとき、洋舞の「バレエ」を書いたのに「パレー」となっていた。「パレー」ならスポーツ用語なので意味がなさないのではないか。

ある句会で「ボーリング」というのが出たとき、球ころがしか、穿孔か、という質問があった。主催者が困っていたので、

「ボーリング」なら穿孔で、「ボウリング」なら球ころがしだと助言したことがある。これは「バレエ」と「パレー」と同じような理屈っぽい言葉になるかも知れないが、新聞などではこのようにハッキリ区別しているのである。

つぎのことは題ではなく、題のあつかい方だが「膳(へそ)」という題に「膳が茶を沸かす」というのが入選した。句者も選者もベテランだった。路郎先生から「このような句は校正のとき削るように」と厳命をうけた。

麻生路郎という川柳の鬼のいない今日の句会に、やや弛みに似たものを感じられるが、どんなものだろうか

(不二田一三夫)

★

▼川柳展望五周年記念川柳大会 第二回火の本賞発表会

とき・昭和55年5月5日午前10時開場 ところ・新大阪チサンホテル4F かいひ・千五百円(新子染筆色紙進呈) 席題一題・当日発表一題と選者/猿・渡辺和尾/針・森中恵美子/川・橘高薫風/瓶(びん)・八坂俊生/野・墨作二郎/鳥・中尾漢介/縄・定金冬二/月・時実新子/各題2句・秀吟呈賞・出句締切りは11時30分。寺尾俊平独演60分・ティスセッション(作者と選者)記念パーティ。司会天根夢草、山河舞句。世話人代表・橘高薫風・森中恵美子。主催川柳展望社。

写真・右から敏・一声・久米雄・
娛句楽・与呂志諸氏。



吉永川柳社訪問

ペン 児島与呂志

カメラ 塩満敏

八十歳のお軀、以前から血圧が高いので元氣な朝の訪問なので大変機嫌よくお会い出来ました。

一月十五日（成人の日）九時半。前日十四日塩満敏君と二人で岡山県和気郡吉永にある「よしなが川柳社」の新春句会と横山一声さんの新築祝いにお誘いを頂いていましたので出かけたのです。久米雄さんと「備前川柳社」に私が初めて出かけたのは二十五年ほど前やつたのと違うやろかと思いますが葭乃先生、春果先生と淡舟さんに連れて来て貰い、それからこの川柳の町吉永の地方の集いらしい心から川柳を楽しんでいるグループであること、川雉支部で通じていたまま現在の川柳塔を支える地方の会で一月の新春句会七月のうどん祭り十二月の川柳忘年会となごやかに町ぐるみで川柳をわかつて貰っている実践型川柳社だと思ふのです。今現在久米雄さんを中心に横山一声さんを会長に二十名絶対の例会を続

けている。十四日十七時前に敏君と着いた吉永駅はしばらくぶりの故郷のようで大阪生れの私には故郷が無いので何時も地方の駅に立つと故郷のように思ふことが多いのです。

久し振りに故郷みたいに歩が踊る 与呂志
タクシーが駅前で二台待っていたのでそれで行く事にした。私は一声さんに電話して迎えに来て貰うようにと思ったのだけれども敏君は始めてなのでそれは止めようと云ったのだ。私にしたならそれが当り前のように思ふ程の付き合ひのように思ふ厚顔ましさがありません。実際考えて見ても一声さんとも逢う数にしても四、五回、それも二十五年の内にあるのに、後は只文通だけそれも川柳だけのお付合ひであるのなのに、やらしい奴やと思われているかもわかれへんのにであると乗った車の運転手はおばちゃんだった。横山さんとこへたのんまずと云うと、民謡の人でつか、いや川柳をやったはる人やねん、あの人は何んでもやはりはまんねんなど吉永では評判の一声さんである。

前夜祭では奥さん息子さん夫婦のお手料理で久米雄、正州、浄美、芳月、と寄って一声さんの新居での酒宴に昔の話で十一時頃まで楽しい一夜を過ぎして戴きました。

十五日の当日午後一時からでしたので九時過ぎから久米雄さんといこへ伺ひし、

握手した手が離れないまま坐り（久米雄）の句碑と久し振りの対面、敏君は初めての対面で写真をぱちぱちと撮る。久米雄さんも七十歳と云うけれども、元氣一杯ほんまに川柳

古くとも僕には仁義礼智信 路郎先生の第四句碑がある大森娛句楽さんの玄関に七年振りにお訪ねした。ここしばらく娛句楽さんからお便りにお歳がらのお軀を案じて居りましたし編集部の一三夫さんからもよろしくとのこともありましたのでお伺ひ致しました。

好きである。一声さんの車でその後浄美さんのお家と正州さんのお家をたずね、お墓めぐりとて路郎先生の句碑を廻り、閑谷学校まで三人で快晴を楽しみながら一声さんが作られた案内表示板の話を聞かせて貰いました。

午後一時句会に十二時になると続々と川柳好きの柳人集合出席者二十六名、新築のお祝

80年代を

よい年に

——新年おめでとう会

1月13日午後5時半から、本社役員の新年おめでとう会が、なにわ会館の二階三号室で開かれた。

香川の三井酢夢さんほかの飛び入り出席もあって賑やかに会が進んで行く。

医師会の新年宴会と掛け持ちの生々庵主幹がまず新年の挨拶に起たれる。今年は好郎氏の句集「遍歴」の刊行記念句会をトップにお

いと挨拶で川柳塔のおすめをしました。地方には地方の川柳の楽しみ方もあります、それぞれ川柳への考え方もありますので、それなりの嫌われようにすすめ参りました。兼題は久米雄・一声、席題は杉原胡風・与呂志と明るく新居で楽しい会やかな大会でした。句会後の宴会でも柳論口角泡を飛ば

雅号ぶつちやけばなし (187)

ふみえ



白 岩 文 衛

しらいわ

文衛というのは本名です。私の家は当地の神官の家で、代々、白岩織部を襲名していたのですが、私の曾祖父は織部を名のらず、折衛と称したのです。この折衛は豪毅な人で、和歌や俳句を友とし、学問にも秀れた人だったそうですが、私の生れた時父はこの曾祖父にちなんで文衛と名づけたのだそうです。

子供の頃は「ふみえ」というのは女の子のようで、少し不満だったのですが、川柳を始めるようになってみたら、「文衛さん、文衛」といわれ、うしろに、「ふみえ」という音が武骨な身によく似合い、これ以外に雅号はいらないと思うようになり、そのまま本名を雅号にしてみました。(教員57歳)

すすまじさのほんまに川柳好きの皆さんにいつもの私の大声で失礼をしたかとも思いますが、これも私のほんまの心だと言いつつも、解って頂ければ幸だと思っている厚顔まじし死なんと直らんでしようが許し下さるだろうか。楽しい二泊三日のよしなが川柳会でした。

めでたがつづく。と80年代のさいさきのよいことをのべられ、栗副主幹は三月の没食子・カネ女さんの「夫婦」刊行記念句会、五月は「自身の句碑建立、六月は瓢太氏の句集「紅華」の刊行記念句会、そのほか未発表の大きなよるこびがまだある。(次号で発表できそうである)

とにかくよいことづくめ80年である。生駒の葎乃先生は八十八歳になられるので、米寿のお祝いもしたいと栗氏が結ばれると、好郎氏の音頭で乾杯。

瓢太氏の「紙芝居」を皮切りに各人の隠し芸がにぎやかに披露される。一昨年からは役員だけではなく同人諸氏の参加を得てより盛大に行うことにきまる。(主幹から金一封拝受)

出席 一三夫・与呂志・敏・柳宏子・瓢太・吸江・花梢・勝晴・滋雀・凡九郎・善紫・鬼遊・没食子・寿馬・萬助・三十四・紫香・潮花・大茂津・栗・酔々・一三三・形水・好郎・小松園・生々庵・雀踊子・薫風・酔夢・岳人・メ女。

急逝に保険解約悔まれる 代仕男

健康のまじない保険を杖とする 秀峰

或る時の備え小さき保険かも 早苗

万の一を保険屋繰り返し 胡頹子

子の誕生学資保険にかけたる夢 みどり

満期金孫の学資に持ってかれ テルミ

保険金手にして過去の走馬燈 豊生

実直な夫婦簡易保険だけ 方大

とある日保険の額を妻が聞き ゆう也

断われぬ保険恩師が勧めにき 雅水

逝くときはせめて黒字と保険かけ はじめ

ひそひそと保険にも触れ通夜の席 右近

父母達は葬儀料だけ保険かけ 喜洗

義理からむ保険が役立つ不倖せ 武水

新種保険次から次ぎと勧めに来 八文銭

満期来た保険で米寿の祝いする 道子

保険屋の話題豊富に隙がない 彩平

保険金冥土の旅の置き土産 掬治

佳

嫌われても微笑崩さぬ保険屋さん 春日

保険料払って今年の命買う 裕

保険金持つて亡夫の愛に泣く 千子

保険屋のメモにそろそろ生れそう 太柏

夢にまで保険屋を追う棒グラフ 宵明

人

しぶとさが身上保険屋向きに出来 軒太楼

地

ウインドで保険をつけてある光り 宵明

天

保険勧誘一緒にテレビ見てねばり

軸

入院し保険の掛け金惜しからず

しつけ糸

高橋操子選

しつけ糸と間違われてる飾り縫い

初詣晴れ着の袖のしつけ糸

しつけ糸母の悲願を知っている

雨霽る今日の佳き日のしつけ糸

しつけ糸上手に抜きとり糸巻きへ

嫁ぐ日待つ幸せのしつけ糸

しつけ糸もう亡父さんの丈を越し

しつけ糸柄はめながらとってやり

成人へ無理した晴着のしつけ抜き

しつけ糸かけて寝圧しの母の床

しつけ糸とれば個性に流される

しつけ糸掛ける手先へ夢をのせ

しつけ糸取る時もどかしい子の晴着

しつけ糸糸取る時判る腕の冴え

しつけ糸糸まるめ見上げる娘の晴着

しつけ糸糸他人の倅せばかり縫い

可住

しつけ糸切つて舞初め春姿 みどり

廻れ右もさせてしつけ糸を取り ろ亭

しつけ糸平気で歩く一人者 方大

しつけ糸役目はたせば丸められ ゆう也

アイロンをちよつとかけるとしつけ糸 一路

出稼ぎの夫を待つてゐるしつけ糸 桐下

しつけ糸取らぬ晴着の野辺送り 通風

しつけ糸のままタンスで眠られ 美乙女

嫁入りをした来たままのしつけ糸 実男

しつけ糸急げば急ぐほど取れず 勝一

しつけ糸にも絹と木綿の使い道 綾女

しつけ糸抜いて豪華な嫁御寮 彩平

内職のわが娘に着せたいしつけ糸 素身郎

しつけ切る指に女が満ちてくる 大柏

佳

しつけ糸でこまかす事も知るお針 綾女

前うしろ母が気になるしつけ糸 木魚

しつけ糸みなまで抜かず着せてみる 太柏

嫁ぐ子へ悲喜交々のしつけ糸 優

しつけ糸の誇りは誰も気付くまい 千代香

人

はしやく子を追いかけはやくしつけ糸 胡頹子

しつけ糸のような姑です日々平和 千代香

地

しつけ糸とる袂から幸せがのぞき 千代香

天

しつけ糸とる袂から幸せがのぞき 千代香

軸

老の夢しばしはしやくしつけ糸

初歩教室

題 — 電話 —

本田恵二朗

—— 笑うても泣いても年輪ふえ続け ——

どうせふえ続ける年輪なら、泣くよりも笑つての方が気が楽である。いっそのこと、年輪を忘れてたら、一層すがすがしいであろう。

—— 泣き笑いの人生だから面白し ——

人生はドラマだ。だから泣くシーンもあれば笑うシーンもあるのが当然である。泣くときは思い切り泣けば気が晴れる。笑うときはお膳が逆立ちするほど笑えばよい。人のために一緒に泣いてやる。人のために一緒に笑つてやる。そんな純情を互に持ち続けたい。

—— 少々多笑そんな心になり給え ——

くよくよと念い思ふ表情よりも、明るいのは笑みの表情の方が好感を提供するに決つてゐる。それは自分自身にプラスすると同時に周囲の人へもプラスするという好ましい功德を内蔵している。そんな柳友達の人生活路は楽しくまた充実したものとなること必定だ。

長電話肝心なこと言い忘れ

八文銭

間違ひの電話が夢を覚させる (間違ひ電話が夢路に突き刺し)	同	間違った電話が夢を覚させる
団欒を暇な電話に破られる	同	団欒を暇な電話に破られる
無遠慮な電話に仕事の邪魔をされる	同	無遠慮な電話が編み組をわせる
(無遠慮な電話が碁石迷わせる)	同	無遠慮な電話が碁石迷わせる
売れ妓は電話刷らない名刺持つ	同	売れ妓は電話刷らない名刺持つ
電話では用のすまない候文	同	電話では用のすまない候文
(電話では間に合わない名刺持つ)	同	(電話では間に合わない名刺持つ)
娘の電報顔が見えます母の目に	同	娘の電報顔が見えます母の目に
(娘の電話言葉の余韻に温められ)	同	(娘の電話言葉の余韻に温められ)
(俾せな余韻のはの娘の電話)	同	(俾せな余韻のはの娘の電話)
初電話係からはつきりおめでと	同	初電話係からはつきりおめでと
(オメデトウ上手に言えた初電話)	同	(オメデトウ上手に言えた初電話)
子の外電病の母を元気づけ	同	子の外電病の母を元気づけ
(外電の子の声病母の胸温め)	同	(外電の子の声病母の胸温め)
電話待ついたらだちを知る食器棚	同	電話待ついたらだちを知る食器棚
(電話待ついたらだち組は知っている)	同	(電話待ついたらだち組は知っている)
忘れたい電話番号まだつむ	同	忘れたい電話番号まだつむ
(忘れたい電話番号まだつむ)	同	(忘れたい電話番号まだつむ)
姉妹の音が似ている電話口	同	姉妹の音が似ている電話口
(姉妹の音が似すぎる電話口)	同	(姉妹の音が似すぎる電話口)
娘の電話がすかに孫の笑い声	同	娘の電話がすかに孫の笑い声
(娘の電話がすかに孫の笑い声)	同	(娘の電話がすかに孫の笑い声)
娘の電話係の足音(いし)	同	娘の電話係の足音(いし)
気にさわる電話にこぼすとい言	同	気にさわる電話にこぼすとい言
(気にさわる電話にこぼすとい言)	同	(気にさわる電話にこぼすとい言)
世話好きが家計ひびく電話代	同	世話好きが家計ひびく電話代
(世話好きの家計にひびく電話代)	同	(世話好きの家計にひびく電話代)
(世話好きの通話料など考えず)	同	(世話好きの通話料など考えず)
十円が無くなりまして切る電話	同	十円が無くなりまして切る電話
(十円玉が切れたわと切る赤電話)	同	(十円玉が切れたわと切る赤電話)
お前かと言葉が変る電話口	同	お前かと言葉が変る電話口
(ナンカオマエカと変る電話口)	同	(ナンカオマエカと変る電話口)
電話あるのに何年ぶりの便りくれ	同	電話あるのに何年ぶりの便りくれ
(電話があるのに何年振りかの便り)	同	(電話があるのに何年振りかの便り)
うちの人がかり聞かせる長電話	同	うちの人がかり聞かせる長電話
(うちの人の人がかり聞かせる長電話)	同	(うちの人の人がかり聞かせる長電話)
控え目の電話が恋を抱いている	同	控え目の電話が恋を抱いている
(つづましい電話が慕情抱いている)	同	(つづましい電話が慕情抱いている)
お辞儀して口ずくろうた長電話	同	お辞儀して口ずくろうた長電話
(ベコベコと口ずくろうた長電話)	同	(ベコベコと口ずくろうた長電話)
電話線たぐり抱き度いそんな夜	同	電話線たぐり抱き度いそんな夜
電話口メモ用紙みな使い切り	同	電話口メモ用紙みな使い切り
(メモ用紙使いはたした長電話)	同	(メモ用紙使いはたした長電話)
夢に見るこいし声聞く電話	同	夢に見るこいし声聞く電話
ハイハイと小走りながら電話口	同	ハイハイと小走りながら電話口
(電話ヘルハイハイと息ぎ足)	同	(電話ヘルハイハイと息ぎ足)
暇だからかけた電話はみんな留守	同	暇だからかけた電話はみんな留守
赤電話電報のような言葉だけ	同	赤電話電文みたいなガチャリ切り
(赤電話電文みたいなガチャリ切り)	同	(赤電話電文みたいなガチャリ切り)
電話口嫁にも欲しい応え振り	同	電話にも笑顔絶やさぬ可愛い娘
(電話にも笑顔絶やさぬ可愛い娘)	同	(電話にも笑顔絶やさぬ可愛い娘)
丁重にもてなし銀行の一番	同	日直も電話当番にあけくれる
(日直も電話当番にあけくれる)	同	(日直も電話当番にあけくれる)
長距離の電話おせちを焦げつかせ	同	筆不精電話長々無駄話
筆不精電話長々無駄話	同	筆不精電話長々無駄話
(五通話ほど喋りまくった筆不精)	同	(五通話ほど喋りまくった筆不精)
口添えの知恵が受話器へ洩れて来る	同	口添えの知恵が受話器へ洩れて来る

呼出しの電話馳けて来た息づかい

同

(馳けつけたらしい受話器の息づかい)

なみ

温りの灯がこいしくて娘に電話

同

(児の声へ受話器うつとり酔っている)

伊都

長電話自分の時に気がつかず

同

(異性から子への電話が気にかかり

同

異性から子への電話に耳を立てて

美佐

長距離の電話早口でまくしたて

同

慕情はるか電話に思ひはとばしる

同

(電話口慕情の声がふとどもり)

小雅子

電文のような息子の赤電話

同

合格に明暗もある赤電話

同

(合格の明暗知つてる赤電話)

胡頼子

もしもしと焦らせる孫の初電話

同

間違えた電話冷たくあしらわれ

同

(間違えた受話器に返えるつっけんどん)

佐代子

それからそれからと長い娘の電話

同

(受話器からきれいな声できつい言

同

受話器からきれいな声の小言聞く)

利美

モシモシと出ればわたしでわかる声

同

(わたしでわかる電話の甘い声)

同

嘘つきの手本を電話で見せるママ

同

鈴の音と変る電話へ虹走る

同

逢いたさを指先に秘め初電話

同

(初ダイヤル逢いたさ秘めた指の先)

同

逢える日のときめき受話器を置いてから

同

(受話器置き逢えるその日を抱きしめる)

同

喜びの余韻受話器をそと置き

ゆう也

間違いの電話基盤へまたかかり

同

(間違いの電話基盤はいま佳境)

同

声までもよそゆきにして妻電話

同

(受話器とる他人行儀な妻の声)

同

娘の電話ぐちだけ聞いて話題かえ

同

合格の電話が献立かえさせ

同

友の計に言葉乱した受話器置く

同

(友の計へ受話器置く手がふれ止まず)

同

賀状では足りぬものあり初電話

阿蘇美

垣根越し話せる隣と長電話

同

裸とも云えぬ電話で風邪を引き

武水

こちらからかけ換え気兼ねなく喋り

同

電話での謹賀新年籤がない

同

長電話へのへのもへじ画きながら

同

電話でも云えない話あと文で

同

(口下手の電話結局あと文で)

同

着払い国際電話は親が持ち

同

(通話料は親持ちハワイからの声)

誠一

淋しさへ電話のダイヤルまた回す

同

さよならがこわく受話器を置きしぶり

同

母からたの電話達者な声ひびく

同

新入社とかく電話へ出たがらす

同

同姓同名へ親しみ覚え電話帖

瓢太

(同姓同名これも縁か電話帖)

同

赤電話エンエンとまだ続き

同

(延々とまだ続きます赤電話)

同

(延々とどこかに続く赤電話)

柳五郎

電話では言えぬ思ひえ振りの舌

同

電話ではききう言ひ逢えれば低姿勢

同

停電の闇に電話が突き刺り

露杖

お互に電話で済ます筆無精

同

(筆無精同志を継ぐ電話線)

同

(電話番号暗記し合つて筆無精)

同

梅見頃呑みに来いと電話くる

三十四

(梅見頃徳利が待つてるぞと電話)

同

電話での借金虫がよすぎるぞ

同

おねえのいま一と息へ電話鳴り

英子

合格の受話器へ凱歌挙げ合つて

同

飯病とも知らず電話へお大事に

同

声だけは齡をとらない電話口

同

老婆のために電話があるみたい

同

題 神妙 3月20日締切 (5月号発表)

同

宛先 岡山県倉敷市下津井 一九一三四

同

千七一一

本

田

恵二朗

戦中回顧

鈴木村諷子

靴下に米をもらつて征つたきり

同

これ軍手お前も生きて居つたのか

同

遺骨背負つて明日の命を誰か知る

同

靖国へ詣ちやならんとだが言う

同

さびしきは陸軍墓地も取りこわし

同

鮎八等旭日章胸張つてもたもつ故人

同

乾パン袋遺骨袋になろうとは

同

まだ生きて老いてだまつて鎌を振る

同

戦地征た者だけわかるこの気持

同

乾パンの金平糖も頒け合つて

同

亡き戦友へ

同

もう一度酌みたしアンペラ兵舎から

同

戦時耐えて妻よ天晴ようやった

同

軍隊手帖記念館なともう行くか

同

大 萬 川 柳

「片 手」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 三百九十二句
入 選 四 十 六 句

宝塚 静馬
片手持みの演技に母親乗ってやり

正座して片手で飲めぬ茶に疲れ
片手には妻でありたい指輪はめ

大洲 曉明
お手並みは片手間という謙遜

藤井孝 与呂志
ふるさとの土産は片手では足りず

八尾 夕花
片手間に咲かせた菊の太らかさ

鳥取 豊生
ふく鍋へ片手片手が伸びてくる

和歌山 勇太
片手でも握れる夢を持つて生き

大 阪 ふみ
ペンダコの片手に妻子ぶらさがり

大 阪 智子
恋たのし片手を彼の手にゆだね

西宮 喜代子
片手には子供を抱いていた苦勞

和歌山 幸
ダイヤルの右手に慕情燃えている

米子 雄々
差しのべた片手に愛を意識する

大 田 軒太楼
公傷の片手が痛む寒の入り

兵庫 白 李
片手では盲導犬へ血が通い

鳥取 静泉
五億円を表わす片手だつてある

笠岡 桃 里
原爆忌残る片手で香を焚く

大 阪 君子
躍動の片手に市場揺さぶられ

富田 林 優
握手した片手が票につながらず

寝屋川 あいき
つかみ取り片手の量は知れたもの

平田 代仕男
一斉に片手が挙がる参観日

倉敷 方 大
片手間が有名になる原稿紙

和歌山 英子
せめてもの片手動けと麻痺の子へ

米子 なみ
片手落ちの裁きを裁く赤穂義士

大 阪 勝 美
千手観音片手片手にある祈り

岡山 千代否
片手では動かぬ石の黙秘権

大 阪 小雅子
片手間の妻のバイトが頼られる

今治 南 奉
右手から見れば左手頼りない

奈良 カズエ
ポケットの片手は怒りにぎりしめ

鳥取 洋々
政治家の片手は賄賂たぐり込む

米子 美 佐
宣誓の片手に空も晴れ渡り

和歌山 寿子
七転び片手は意地を握りしめ

大 阪 文 秋
千羽目の鶴が片手に軽すぎる

大 阪 文 秋
易の灯に片手あすけてなお迷い

和歌山 和子
せり売りの片手さばきにある戦さ

和歌山 和子
誓約書片手に翔んでいる女

和歌山 和子
片手振る軽い訣にある余韻

和歌山 和子
感動の握手は片手では足りぬ

住 句

宝塚 静馬
左手の地味な助力を忘れ勝ち

寝屋川 英壬子
ますかけの片手へ夢をふくらます

尾 鷲 伊津志
天と地を片手でつなぐ風の糸

大 阪 小雅子
輪光の弥陀の片手に縋る慈悲

鳥取 洋々
片手落ち許さぬ六法全書練る

人ノ句

大 阪 道 子
片方の手だけ戦争まだつづき

地ノ句

和歌山 武 雄
片方の手は鞭を持つて親心

天ノ句

西宮 百 酒
企みを片手に妥協の手を握り

選者 吟

片方の手は贈興を拒んです

昭和五十五年度

ベストテン（一月現在）

一 小雅子 四、〇 大 阪

二 武 雄 四、〇 和歌山

三 智 子 四、〇 大 阪

四 百 酒 四、〇 西宮

五 右 近 四、〇 大 阪

六 道 子 三、〇 大 阪

七 和 子 三、〇 和歌山

八 洋々
九 優
一〇 英壬子
一一 静馬

二五 鳥取
二五 富田林
二五 寝屋川
二五 宝塚
以下略

訂正
前月「序幕」の
こがらしの序幕は枯葉舞うてくれ
の入選句は江口 度氏の句でし
た。訂正しておわび申し上げます。

昭和五十五年第四回

「肩」三句以内
締切 三月二十五日

(係) 第五回「交替」三句以内
締切 四月二十五日
投稿先 〒393 堺市堀上緑町一三三七
藤井一二三万 大萬川柳係

川柳塔社常任理事会 (二月四日)

80年代初の常任理事会ということで盛りだくさんの議題が出た。

まず決まったことは、この二月で満八十八歳になられた生駒の葎乃先生の米寿を常任理事の有志でお祝いすることになり、同月二十二日に生々庵・栗・好郎・形水・薫風五氏が代表して参上する。

西尾栗副主幹の五月十八日の句碑除幕式の句が決まる。「一步出すれば我れ 旅人となる心―水鶏庵 栗」

これは内定だが55年度の本社同人総会を松江市で開らくことになった。開催日など開催地柳人と相談の上発表。

したがって二賞発表句会は10月7日(火)午後六時から「金属会館」の予定。

生々庵主幹と故路郎先生の句碑が本年六月ごろ淡路で建立されるが、これは直原玉青画伯と関係のある方が企画されたものである。路郎先生の句は、

―酒とろりとろり 大空のころころかもと内定し、阿萬萬の氏が写真技術を生かされることになった。旅人。普及版に使用し

た路郎先生の写真も氏の撮影である。

句会受け付けが今のところ与呂志氏一人にかぶせているかたちになっている。そこで句会部の方々にご助力を願うことになった。与呂志氏と三人一組で四か月間に一回となります。生々庵主幹、栗副主幹、好郎同人部長からこの案が出ました。

56年度の「新年おめでとう会」から、本社同人全員が参加していただくことになった。この予告は11月号と12月号の本誌に出す予定です。往復ハガキは出しませんが出席申し込みのハガキをいただくことになりました。その他のことは本誌で発表。

本社句会の兼・席題の題をときどきいただくが好題は採用させてもらっています。女性柳人もドシンドシお寄せねがいます。

どこの柳社も同じだが、カラーになっているものがマンネリになる。だがこの際、いろいろ変った企画がほしいのでお恵拝借したいと思います。「川雉」時代には動物園・撮影所見学などやりました。(2月4日記)

出席 生々庵・太茂津・形水・紫香・潮花・栗・与呂志・薫風・萬の・好郎・小松園・岳人・一三夫(敬称略)

NHK川柳募集

課題「記憶」 平賀紅寿選

「芽」 川村好郎選

各題別々にハガキに三句以内、三月十日までに投句して下さい。

投句先 郵便番号 五四〇

大阪市東区馬場町
NHK近畿本部

発表 三月二十一日午前九時十五分、NHKラジオ第一放送(全国放送)の「老後をたのしく」の時

間

今回は「川柳特集」として午前九時十五分より四十五分間、川柳雑誌のみ放送される予定です。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

現金書留でYFC事務局川柳セミナー係へ。なお主幹と故路郎先生の句碑が淡路に建立される。詳細は追って発表。

▼直原玉青画伯の揮画に魅せられ四年間にわたり師事、お世話になったマイルセル・ Hoffman (米人)氏がそのおれに守口市の英会話教室に無料奉仕を申し出た。(読売新聞1月15日付から)

▼第二回「冬青賞」作品募集。3月31日締め切り。詳細は蟹の目川柳社へ。

▼番傘の三月号から一般近詠の新選者に榎本聡夢氏、事務局長の西村芳川氏は辞任された。

▼同人の動向△

▼NHK川柳は好評で3月22日午前9時15分の同ラジオ第一放送(全国放送)の「老後をたのしく」の時間

を「川柳特集」として平賀紅寿氏との対談など45分間が川柳一色になる予定。

▼尼緑之助氏(出雲市)から「島根で聞かれる句会には出来るだけ出席しています。川柳塔の「とりで」です。」

▼本田恵一朗氏(倉敷市)の句碑「足跡を残そう砂のある限り」のある県立児童高校が新築移転、旧校舎の前に句碑が生まれかわった。由森田布堂氏(鳥取県)の句碑が建つ。句は第2回路の句賞「身よりなき老優いくさのことにふれ」(記念川柳大会など近く発表される清水一保氏から)。

▼三井酔夢さん(香川県)は本社のおめでとつ会の帰途、薫風さんと岐阜の東野大八氏宅へ立ち寄り、四国新聞文芸大会の川柳部の選者として出席、万丈の気を吐かれた。

▼西村早苗氏の川柳仁多一月号の表紙の2に、栗氏の賀状が二度刷り出ている。元旦や七十年の猿芝居、栗。発行所「島根県仁多郡仁多町三成三九九・西村早苗方」にた川柳会。

▼羽原静歩氏(守口市)から昭和40年頃から胃潰瘍に浸りきつたような人間で、すが命だけは大切にします。

▼小砂白汀氏が主宰する「川柳わかあゆ」が一月に創刊号を発行。橘高薫風氏の句集「檸檬(れもん)」から五句、作品は同人の白汀氏と芳枝さんほか。発行所「島根県大原郡木次町、三小砂方わかあゆ川柳会、三百四十丁」。

▼草深醉升氏(奈良県)の夫人、キヨノさん(65)は子宮癌手術後の血清肝炎のため昨年12月30日、新年を前に自宅で死去。謹悼。

▼垂井千寿子さん(和歌山市)の母堂が昨年10月末に亡くなられ、その納骨に12月25日に高野の墓へ行かれたが雪が積もって樹木の美に打たれたとか。納骨へ片道だけの母を抱き、千寿子

ら「昭和40年頃から胃潰瘍に浸りきつたような人間で、すが命だけは大切にします。」

▼3月の句会△

▼菜の花句会は十日(月)夕六時から西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車西南歩約三分幸福相互銀行うら。会費三百円。兼題及び選者「横丁・栗」遺蹟・酔々・森・美幸・並・未定。席題・二題(兼・席とも各題五句以内)投句各一句毎適當な句箋に記入。裏面に雅号記名。郵券百円同封。切は前日到着分限り。投句先〒581八尾市高安町北一丁目二五路美幸宛。

▼南海川柳部は13日に南海電鉄本社食堂内で開催。題は「訓示/世間体/地方版」

▼大阪川柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「自信/独り言/意地/指」

▼東大阪川柳同好会は22日(土)六時から東大阪中央公民館2Fで開催。(近鉄永和駅南)題は「辞令/指/敵/リター/席題當日二題」

▼植村客遊子氏(姫路市)「姫路から五人、久米雄氏にお世話になっていますと、

第七回西日本岡山大合から国鉄川柳人の寄せ書き拝受。本社同人の雅号がギッシリ詰まっている。

▽旅 信△

▼植村客遊子氏(姫路市)「姫路から五人、久米雄氏にお世話になっていますと、

第七回西日本岡山大合から国鉄川柳人の寄せ書き拝受。本社同人の雅号がギッシリ詰まっている。

▽旅 信△

▼植村客遊子氏(姫路市)「姫路から五人、久米雄氏にお世話になっていますと、

第七回西日本岡山大合から国鉄川柳人の寄せ書き拝受。本社同人の雅号がギッシリ詰まっている。

新同人紹介

五十嵐

操 史
栗・甲吉推薦

竹

内 寿美子
緑之助・早苗・鶴丸推薦

本社 二月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

（こんなところスキーだよりしきりとあつて外出よりコタツの中が恋しいせいか、どうも句会の出足がにぶい。）

二月から生々庵主幹が、読売ファミリースークルの川柳の部を担当される、そのいきさつなどを読売の係りの人から説明があつた。まず戸田古方氏の柳話から二月句会の幕があく。「事事如意」という題である。（後日誌上で発表の予定）

暗合の句の話から進められていく。豆萩さんや一茶の句から愛の姿を描き、さらに川柳の真髓「穿ち」に触れ、路郎先生の不洞洞会会員（同人）であることを誇りとする、われわれの心がまえなど、内容は広がっていく。人間陶冶の詩「を生命の信条とされる柳話は時間いっぱいづく。

他社の方々の友情で出席もあつて、とにかくにぎやかな句会にしていただいた。

兼題「角」の選者、野村太茂津氏が会社の

仕事のため欠席、代わつて児島与呂志氏が句せんを握る。

女性選者3、男性側3という珍らしい選者構成だった。

今月の月間賞杯は橘高薫風氏にかがやく。

（受付―児島与呂志・塩満敏）

（進行―西田柳宏子・記録―高杉鬼遊）

出席 生々庵・古方・静歩・雅風・瓢太・薫風・滋雀・勝美・与呂志・千万里・潮花・白宗・水客・紫香・一三夫・庸佑・喜醉・萬的・夕花・清人・吸江・憲祐・三十四・柳宏子・みずは・頂留子・度・久・以兆・之紀・綾女・あいき・栗・善紫・小雅子・敏・好一・君子・一明・鬼遊・弥生・寿子・鎮彦・凡九郎・規不風・桐下・酔々・岳人・雀踊子・小松園・恵美子・文秋・柳伸・千寿子・敏・翠光・涼一・好郎・英王子・葉子。

席題「裏目」

宮尾 あいき 選

裏目から人間強くなつてゆく
人生はこんなものさという裏目
裏目の方がきれいに揃う毛糸編み
落ちこぼれもう裏目には慌てない
裏目にも変身できる場数踏む
突きつめて行けば裏目につき当り
人生の裏目にひたすら刻稼ぐ
あの時の裏目で俺の目がさめた
裏目にも対処順風に甘んじず

鎮彦 庸佑 小松園 一三夫 三十四 滋雀 庸佑

急ぐ日の信号又も赤となる

男気が裏目となつた社の人事

易者の言葉きつちり当つていた裏目

裏目とは言わず試験として耐える

神様が試す裏目へ奮起する

宮参りして事故に会う帰り道

絶好調の隙間をのぞきにくる裏目

これしきの裏目へ足踏みなどしない

大ものの裏目賄賂を裁かれる

遠慮した辞退をあつさり他へ廻まし

信頼が裏目となつためぐらばん

好きだから拗ねたを嫌いと誤解され

人間模様裏目もあつて巾がでる

買ひしめたカズノコ倉で欠伸する

薬つかむ気で買った馬券の紙吹雪

席題「袋」

森中 恵美子 選

新年の袋に抱負山のよう

出勤の勘忍袋を妻が縫い

月給袋開けば羽根が生えている

大団さまの袋から民話こぼれ落ち

若本多久志著

句文集「続・老いの坂」

好評発売中・頒価千円送料共

発行者 若本多久志

本社でお取次ぎいたします。

清人 清人 吸江 柳宏子 千寿子 千万里 滋雀 滋雀 文秋 白宗 白宗 千万子 夕花 鬼遊 あいき 敏 好郎 君子 滋雀

紙バッグ変身用の服も入れ

支那栗の袋ふくらみほほどはなし

手袋を脱いだ握手にあたたまる

里の母何やら袋から出して

袋ごと食べるみかんの潔きよし

よくしゃべる女だ袋に入れとこ

マジックの袋の底は二つある

カンガルーの袋はぬくいマイホーム

古い袋に思い出ばかり詰めてある

善人の慈悲の袋で底がない

笑い袋に女の溜息入れておく

下向きの生活は袋小さく目で

かたくなに離さぬ母のぬか袋

脇役の袋主役をつめておく

片っぱの手袋寒い道に落ち

男からもう袋は神棚に

袋貼る白菜高いなと思

紙袋かむった猫になってみる

月給の袋奇蹟はおこらない

御通夜の席に笑袋が置いてある

紙袋少し軽い夢を入れ

真実が押し込まれてノシ袋

寝袋に住宅情報など要らぬ

某月某日と亡母の字がある種袋

生涯を袋の中の男たち

みの虫のふくろに春がつめてある

やさしさで母に持たせる頭陀袋

一三夫

白宗

夕花

敏

滋雀

弥生

小推子

寿子

夕花

憲祐

醉々

弥生

桐下

醉々

紫香

度人

凡九郎

千万里

度

みずは

生々庵

一三天

夕花

岳人

水客

惠美子

兼題「卵」

河野君子選

目玉焼ならできます新世帯

へそ曲り四角い卵から生れ

卵の殻皿に積んでたこ焼屋

目玉やき妻の機嫌を知っている

めん鶏の習性かなし無精卵

めぐり逢う日を待ちのぞむ無精卵

かえっても竜の世界に居る卵

母となる卵見ている冬景色

卵に目鼻顔に人柄従いて来ず

生みたての卵が垣根から届く

ゆで卵お城の桜は真咲り

故郷捨てた金の卵の過去がある

ウルトラマンになりたくて卵三つのむ

建国祭寒の卵が透いて見え

タレントの卵は銭で茹でられる

病弱で医師の卵に似た知識

コロンブスの卵歴史を丸くする

水ぬるむ蛙の卵うかれだし

單身赴任今日も崩れた目玉焼

物価高騰らぬ卵に救われる

やがて火の鳥とならん日の卵

プロ野球金の卵へ札を積み

ゆで卵が好き男とけんかせぬ

妻がいるように卵に黄身がある

黄金にはならぬ卵を抱く夫婦

たまご屋の電球いつもにらまれる

一年を昼で産ませている鶏舎

優

枯梢

静馬

ベ女

あいき

寿子

紫香

岳人

千寿子

潮花

雀踊子

滋雀

千万里

静歩

一三天

白宗

滋雀

千万里

憲祐

勝美

弥生

清人

惠美子

智子

惠美子

涼一

憲祐

番傘人間座の五周年と

森中惠美子の句集

「水たまり」の発刊をよろこぶ

あつまり

ひにち 昭和55年3月30日(日)

12時開場

ところ 新大阪チサンホテル4F

はなし 惠美子・英子・人間座について

岩井 三窓・寺尾 俊平

河村露村女・木下 愛日

柴田 午朗

だい・せんじや (各一句)

「銀」 泉 淳夫

「君と僕」 橘 高薫

「生涯」 定 金冬二

「女」 岩 井三窓

「再会」 岸 本吟一

かいひ 三千元(句集「水たまり」土)

星) かんばい三千元(同会場2Fにて)

★笹本英子句集「土」当日記念品

★かんばいは左記へご予約を

千560 豊中市中桜塚1丁目17-32

岩井三窓

◎川柳資料展示 私のたからもの展

主催 番傘人間座

後援 番傘川柳本社

裏門の医者の卵は孵らない
孵化されずも少し卵で居たかつた
立春の卵は立つこと考える

乳はなれしない玉子の持つ主張
可能性秘めた卵を立ててみる
いつまでも卵で居れぬ喪が明ける
風見鶏患の卵を見逃がさぬ
卵割つたら未来がころげ出る
親鳥を越す丁の卵で火を抱く
立春の卵にかすかな音がある

兼題「角」

児島与呂志選

角とれて女に皺が増えている
肩はった角度に君の位置がある
曲り角あろうと愛は一途なり
いつ打つか判らぬ角が恐ろしい
角少しかけて豆腐が売れ残り
角かくし見ている父にある涙
歳の功角もまあるくおさめきる
人生の曲り角からまるくなり
角張った顔で親父に似て生れ
野良犬が片足あげる曲り角
バカになることを覚えて角が取れ
ひいらぎの角の痛さを嫁は知る
角家を買って車につつまれ
曲り角しつかり靴のヒモ締める
一角を占めてボス猿いきり立ち
角のあるままの姿を包まれる

度

小松園

岳人

柳伸

智子

弥生

夕花

鎮彦

弥生

君子

夕花

凡九郎

寿子

紫香

憲祐

岳人

美乙女

之紀

喜醉

優

静馬

花村

美乙女

夕花

敏

水客

角とれて男の背中が丸うなり

角度替えて押せば案外もうい人

街角で春風を待つ靴みがき

少しキザな言葉で角封筒に入れ

角取れた頃の常務の費い込み

気の弱い父に危険な曲り角

角とれた言葉で歳を隠すにされ

角のない親子で風船に乗っている

きらきると星は方角詐らず

角の立つ言葉が胸につきささり

年とった証提か姑の角がとれ

鏡少し曇って女の曲り角

運命を決めてしまった曲がり角

道順の目標にされて角の家

村人が守る石仏角に立つ

お知らせ

今秋の同人総会が松江市へ
行くので、二賞発表句会は
ホームグラウンドの金属会館
で開催します。

日時

10月7日（火）午後6時

★なお同人総会は近日日時など
発表します。

好一

文秋

涼一

惠美子

小松園

鬼遊

雀踊子

弥生

みずほ

好一

女子

みずほ

白宗

鎮彦

たしかに右に曲った筈を見失い

この角を曲れば俺が無に等し

兼題「果」

岩本雀踊子選

果籠りの炬燵で春の香を捜がし

湯どろろのうまい果を持つコップ酒

このように待てと蜘蛛の巣風に揺れ

蟻の巣へ遊んでほしい子のひとり

へそくりのありか知ってたぬずみの果

果の中で男と女笛を吹く

果を二つ持つて男は翔んでいる

振り向けば古果に恩師の鞭がある

人間の巣にアンテナが立ててある

父が振るタクトへ娘果立ちする

果つくりの苦勞は男の意地である

生々庵

与呂志

選

度

白李

曲ん手

千代三

岳人

一三夫

寿子

鬼遊

潮花

与呂志

何を選んでいたぐくか

は先様におねがいして

タカシマヤの商品券を

お贈りするのにも心に

くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から

一〇〇〇〇円迄

大阪・東京・京都
3店に共通です



大阪・東京・京都
高島屋

老地物語

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書 締切毎月末着便まで 21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

オーエスケー川柳会

大坂 形水報

老練の沓えは結果を待ち伏せる 一億の一つのドラマ自主自演
トコロテン式に停年やつてくる 沓えすぎた男に女無情なり
便秘症状の太平さん沓えないね 放牧の牛のヒップにあるマーク
秒よみになれば頭の沓えとひらめきと ハンドルを回す角度で命取り
雀たちのんの会議かさがしく やき鳥屋の軒に雀が巣をつくる
ホームコタツ出したら妻は蜜柑剥く 車窓から乗り換え駅のドラマ見え
バカンスの朝寝を雀に起こされる 皆が寝る頃から頭沓えてくる
国宝の屋根に雀のマイホーム 沓え切った大空小さい私です
川柳にた 西村 早苗報
和服着た父のほんとの顔を見た 独 仙
山茶花のうたは哀しい虚飾かも 虎 秋
ポン友を見舞い返事を戸迷わせ 可保留

堪えぬいた女は強い芯をもつ 手相ではもう開運の来てる苦 雪国の里の女の深情
大雪が続く日銭の空財布 叱られたことも忘れた子の寝顔 家風とはこうしたものと嫁さとり
君だけに内心話す不仕合せ マイカーで屠蘇も祝わぬ年始客 元旦や余りに自転が早すぎる
洗濯をするとホロ出す特価品 新年の買状それぞれ句の匂い 人恋し道輪の猿の目に涙
すき焼きの豆腐くだけて終りなり 筆の跡はねて本心ちらと見せ 一月一日伊勢の暦を信じ切る
川柳ささやま 河原みのる報
コンバクト期待の顔が今出来る 大勢の期待を神様どうさばく 期待した嫁は普通の嫁だった
産声と同時に期待を背負わされ 蛙の子だった期待をあきらめる 手袋で鉄火をさばく職に耐え
手袋に縋しかり押えられ 完通のトンネル軍手に酒こぼれ 手袋のままの握手でも足らず
手術医のゴム手意外な事実知る 愛の決算書裁判官が作り 老夫婦小さな決算すましとき
人生の決算かける安楽死 ほんとに刺る決算にも困り 負け犬がお手盛り決算吠え立てる

きみえ 軒太楼 登美也 みのる 千草 静代 亀甲 木公 白馬 鉄花人 舞美子 緑之助 早苗 文平 和人 とも子 テル 越山 ひか平 老萩 与志 ふみ子 百合子 古仙 千代子 宗珠 みのる 孝

川柳しんぐう 川上 大輪報
死ぬおもしろい諷の裏で過去となる 真夜中の目ざめ句作という救い どの道も行き着く所寺の門
残り物へ尾を振っておく犬の知恵 真夜中の秒針律気で正直で 欲捨てた顔で出てくる寺参り
寺詣りの時だけ不孝を後悔し 僧兵の血が騒ぎ出す本願寺 残り物並べひとりの寒い膳
看護婦があくびで返事する夜中 新旧に夜中を分ける除夜の鐘 食あたり知らない母の残り物
真夜中も起きておりますそんな職 白白く干す尼寺にあるしじま そろばんの上手い次男が寺を継ぎ
御布施まで指定お寺の商売気 嬰兒持つ親に夜中も昼もなし 残り物笑って出せる者同志
七転び八起きの杖の寺詣り 集印の寺で京都の茶に融ける 川柳塔まつえ 恒松
心配をかける子もあり合掌す お年玉喜ぶ孫についてはすみ 三味線に合わぬ唄だが喜ばれ
喜びを書く筆の先跳ねており 人間の弱き祈りで支えられ 間に合って呉れよ離島へへりが飛ぶ
折り鶴へ平和を折る爆心地 手放して立てて喜ぶ孫の顔 喜びは天下晴れての式次第

大輪報 漢水 すみれ 武雄 幸 富子 与史 勇太 大輪 十郎 利凡 まさ子 とよ子 雀踊子 柳志 澄孝 鉄晴 冬花 千尋子 登紀夫 町紅報 虎秋 寿美子 みのる 美佐 耕佐 伊都 三和

合格の肩叩き合う掲示板

父の座が職失つてからゆらぐ

父の座を遺影の父が笑つて

家計簿の陰に父の座そつと在り

手枕にそれからを追う夢一つ

退職金それから父の座がゆらぐ

寒菊に坐して父の座秘やかに

日銭追う小さな夢へコップ酒

城北川柳会

引つこみのつかぬ序幕で度胸すえ

序幕だけ一緒にみて見合い済み

押し切った序幕へ波も風もある

村芝居 幕のあくのがおそい事

春の序幕そつと覗いた路の臺

白無垢で角を隠していた序幕

天と地の序幕 静かに陽は昇る

馳落ちの序幕喝采なしたつた

顔見世へずらりと並ぶ総かつら

冬序幕安い灯油を賣いためる

目が合つて恋の序幕の花開く

忘年会序幕は私がマイク持つ

新家庭吾が人生の序幕引く

披露宴の序幕ではじめて誉められる

それ位の苦勞は序幕だ元氣だせ

南座のまねきは京を冬にする

序幕から党主会談もめつづけ

初土俵星取表を白くする

相性など一笑 趣味の舞扇

前評判さすがが人氣の幕が開き

うみなり川柳会

亡夫には悪いが生きたための紅

巡歩

舞吉

鶴丸

醉夢

紫吻

登美也

通児

町紅

弘生報

左春

英千子

道子

午郎

満津子

弘生

右近

美恵

星斗

ふみ

寿幸

きくみ

喜洗

テルミ

千子

一休

炬齊

ハルエ

三十四

秀村

香報

希滿子

百グラム添えてはかりにある色氣

芸で出す色氣に千両つけてあり

街角で声かける人の名を忘れ

あの時のことは忘れました口つむぐ

忘れたい過去は砂丘にうめてくる

ふとん干し太陽の香を抱いてねる

いさかいのゆうべのふとん二枚干す

里帰りお客布団に落ち着けず

寝に帰るだけのふとんが俺を待ち

長病みのふとんへ運ぶ雑煮箸

年の暮凡人ここに來てあわて

晩酌の盃ふせて今日終わる

終局の見えぬ男がそり返り

結果どうあれ面接すんだ水

喝采の終った日から駄馬となり

家計簿にもう明日がないみそかそば

大望の明日へきれいな虹が立ち

街かどの易者がくれた明日の夢

中流の暮しに明日の夢が呆け

和歌山七面句会

初恋は七ツ年上手毬唄

この家を継ぐ子が無くて老夫妻

七十の腰たしかなり舞師匠

七人の家族と食べる鍋の湯氣

浮気ではない盃を軽く持ち

金婚式浮気の虫がまだすそみ

ドラマでは妻やうすと浮気する

七草を過ぎていつもの町になる

家興す望みも過去の語り草

七人の敵も七人敵を持つ

老いて尚浮気自慢の同窓会

富美湖

真人

無山

雄人

熊生

千勢

盛桜

華子

洋々

豊生

笑王

天人

忠良

静夫

大漁

由多香

とし江

葉士人

日満

三幸報

周總

勇次

世津

啓子

寿子

宣子

フクヨ

智水庵

晃

富子

二咲子

七並べ恋占いももつあきた

雨漏りの家だけでもらう遺産頒け

この家族煩わしくて楽しくて

千姫を上手に文楽浮気さし

葉の花句会

二枚舌裏と表を使い分け

よく揺れる電車でモンローが乗っている

人使い荒いが言葉ゆき届き

見物の目が評論家になつてくる

電車下りてポツクリ寺へ春うらら

家出の娘見物してから難い戻る

英雄の風が天までとどきそう

鍵つ子が一人残った縄電車

添いとげる意地丸出しの姉女房

亀が勝つそんな昔もありました

子を想う女に還る終電車

英雄の末路故郷を素通りす

天皇が見物すればゴミ消える

弟を走らす使いは姉の恋

カレンダーの歩みに勝てると思ふかい

使いでのない金だけと預金帳

行列が見えるか見えるか肩車

添え物が欲しくていらぬ物を買

親分はいつも見物席に居る

虎に勝つ男のエトは猿である

川柳わかやま

想い出を語る古老の瞳は静か

思い出がだんだん優しい亡夫にする

思い出の潮騒抱いている枕

泣く時も少年の目は空を見る

よう見える位置を知っている他人

五穂

文厚

品子

三幸

鬼遊報

みずは

弥生

柳宏子

茂雄

栗

鶴声

紀美代

醉々

柳伸

幸生

糸葉

小松園

昭子

鬼遊

凡九郎

頂留子

雀踊子

綾女

度

岳人

与史報

柳宏子

としよ

善太

登紀夫

武雄

本当を見る眼にメカネは要りません
 新春へ温ためあつて親子猿
 血縁の絆三猿にはなれず
 犬と猿夫婦は別の味がある
 猿真似でよし人間らしく生き
 時々落ちる猿にて人気者
 猿知恵が無駄でなかった発火点
 御祝儀にはずむ小猿の三番叟
 武器持たぬ猿に明るい明日がある
 泣かされた着物の父をせめぬ母
 五ツ紋羽織れば父の声がする
 日曜の和服に自分を取り戻す
 衣桁からわたしを責める江戸小紋
 逆境をキリッと泳いでいる和服
 和服着る所作に昔がふと覗き
 岸和田川柳会 植山 武助報

凡九郎 三千代 緑楼 弘生 公子 英子 天彦 武太 千寿子 幸 和子 三男 加仙 三浦 富志子 希久志 白光子 信夫 波津 民治郎 春栄 ひで 武助 辰雄 こう

老人会にはいる勇氣はまだ持てず
 川柳だけはら 森井
 食前の言葉よそではまだ言えず
 開たのようこびたらぬものがなし
 乳たんと出しませ姑のどんこ汁
 産終えた妻の笑顔よかがやきよ
 ふりむけば秋稲こぎまっつきかり
 肩書きが持たす凡なる言葉聞く
 めぐり逢い地球のまるさなど思い
 槌の音ハッシハッシと白柳忌
 はがゆくも女手限度つきまとう
 眠ついても法話は毛穴からしみる
 夕やけへ背負った十字架重たすぎ
 櫛入れて髪ぬけ毛を思ふ秋
 心まで売らずにすんだ茶がうまい
 彷徨と自失の秋や昼の酒
 肩ちよつと凝りまろやかに今日を閉す
 お菓子たべ食へ青春の独り言
 日めくりの余白がたりのスケジュール
 右翼ではないが国旗を誇りとす
 喜んで貰えない反則だつてある
 倦怠期職場に予備の傘がある
 ストレスの解消一氣に水を飲む
 川柳高知 川竹
 代役の立場をくんで顔をたて
 陳情へ市長代理のなま返事
 代役のドラマにイメージ狂わされ
 隅で飲む顔だがママは忘れな
 横顔へ熱い視線を意識する
 無人市秋を並べて商える
 日だまりを追う母親の小さな背

操子 静水 房子 寛子 純舟 笑子 洋之祐 蘭幸 不朽 靖子 節夫 かつ子 西合 かつこ 中一愛 敬子 白狐 一路 英詩 秀夫 松風報 十孝 長坊 一歩 節野 登舟 克子

愛情の誤算へ女落ちてゆき
 本当の顔を鏡の外におく
 川柳後案(岡山市) 井上柳五郎報
 寿号発車合図も照れくさく
 寿の軸を背にした飲みつき
 年寄の生命天寿でまがつき
 寿命ですとは親類素っ気なし
 長寿へのレールはローカル線に似る
 新年の抱負一つも履行せず
 大物の新人態度まででかい
 新米の社員オチケンの余芸もち
 新春へ踏出す歩巾小さくとも
 新しい日記を私の色で埋め
 天命をもつたはなくも自滅させ
 医者の手を離れて神へ命乞い
 逞しい生命力は手をしやぶり
 佳句地10選 (前月号から) 植村客遊子選
 むつつりと面白い人のひとり酒
 一人旅ゆとりの金を少し持ち
 忘れたい愚痴飲みこぼす独酒
 濡れ衣に耐える男の目がすずし
 恩人のことも忘れる程好調
 知恵のない夫婦の軍手干している
 胴上げをしている方も泣いている
 子のために母はけなさに立ち向う
 愛した証拠日記に埋っている
 結局は女の涙に負けている
 麗子 松風 正友 博道 鮫虎 九坡 照路 佐加恵 柳五郎 梁太 恒洋 元水 昌吾 胡風

命ある限り雄草背伸びする

明日ありとはつきり言えぬ命なり

肩巾が大きく見える金バツジ

借金を頼むダイヤル又違ひ

前置きが金の話にチラとふれ

開けるまで金一封が値ぶみされ

東大阪川柳同好会

想出の山の湯浸る老夫婦

血圧を計つてはいる野天風呂

湯けむりに満更でない妻を見る

湯煙りが消えると女の顔が見え

この的と決めて一直線を突く

信仰の的は鯛でことたりる

閻魔王婆の権力使わせず

タクシ一の料金気になる客を連れ

俄雨タクシ一乗場に長い列

コッポリの鈴も笑つた七五三

標的がずれて居たのに気がつかず

裏切りに会う権力の椅子もある

的になるゾウの哀しい眼に出合う

真ん中に当ると二の矢が番えない

的にする男憎めるだけにくむ

駒下駄がはずれ花街石だたみ

ゆるんで鼻緒の下駄を履いた僕

的是はすれ言葉上手の赤い爪

引金にためらいが有るのを替へ

京都塔の会

母ひとりさんま一匹焼く煙

荒彫りの中で木目の顔を見る

月の光にかがやく薄に見送られ

くす玉が廻る秋風誘う窓

哲郎

久米雄

草風

宏太

大

秋月

慶三

喜一郎

弥山人

度

三十四

喜風

綾京

良女

喜洗

滋啓

千代子

湖風

鎮彦

弘生

雀踊子

頂留子

凡九郎

柳伸

かずを

杜的報

明代

紫香

美穂

花代子

親のない人から見れば親不幸

百万弗の灯一つ一つにある生活

頼りない親にまかせて置けぬ孫

父の肩負われた頃の幅話し

退院の歩幅ゆたかに菊に佇つ

もう親を追い越して行く肩の幅

ええ体格の人やなあ湯熨斗屋中を出し

トロッコのレールの幅を蟹が這い

万才三唱おとこの影が幅をとる

酒の唄もみじは高い位置で聞き

饒舌と寡黙ともみじの怖い訝え

虹川柳倶楽部

手離なせぬものを忘れた老眼鏡

ヤレヤレと腰を延ばして今日も無事

正月の猿は少しし器量好し

五億田コンマコンマは俺の税

数の子はやっぱりダイヤモンドなり

娘を飾る晴着選びも母の愛

朝帰り家に漂う低気圧

省エネだ徒歩で語ろう氏神へ

省エネをあざ笑ふごとく寒波来る

毎日をいろはかるたで教えられ

新年の屠蘇酔うている女の子

川柳大阪

世話好きがいつもの暦持ち歩く

堀あるを信じて妻の風呂上がり

御意見は聞くだけ料金値上げ案

生きているだけのくらしを考える

名月を抱くようにして雲流る

休日朝へ青葉の彩まぶし

喫茶店こゝで実った恋でした

芳子

杜的

誠史

弘三

笛鳥

飛鳥

求牙

潮花

水客

白溪子

和友

新岡回天子報

実

勝一

義美

久仁於

小鈴

故春

一竿

朴吉

火竜

虹汀

回天子

児島与呂志報

誓二

雅巢

天平

天樹

君枝

洛醉

敏

好物が並ぶ旅先はずむ酒

考え方変えて挑戦してみよう

借景へ土塀は腰を低く居る

料金が上つて長湯になった母

見送つたホームから来る喫茶店

考えがさつぱりつかめる喫茶店

高塀の家へラーメン届けられ

覗かれる塀の高さを気にしない

退職金夢は一人で使いたい

死刑囚まだ逃げ道を考える

考える嘘は女が見逃さず

とんぐり川柳会

母の座へすわつて降参口にせず

降参は出来ぬ妻子の目が囲む

日本が降参した日 母ありき

降参をしてから女 策をねり

子に自信持たず降参なら耐える

伊勢エビはどたばたしない十二月

体験を生かせとマナーだけ教え

マナー悪いから仁王にらまれる

どたばたの笑いは直ぐに消えてゆく

降参と見せ妻は爪を研いでいる

降参をしてる形で酔いつぶれ

けもの道マナー残したけものたち

どたばたと撮つた写真に顔がない

どたばたと時計の針はマイペース

南大阪川柳会

熱心な男時間も距離もない

熱心に聞かす話し長くなる

熱心な人やと裏のある言葉

身についたソフトムーードに欺される

喜酔

三十四

弘生

道子

九平

希久志

秀峰

笑風

胡蝶

本蔭棒

与呂志

史好報

サヨ

憲祐

吸江

真砂

雅風

岳人

好郎

鎮彦

千代三

万里

鬼遊

醉々

儀一

史好

滋雀報

度

鎮彦

凡九郎

柳宏子

信じ合ふ心ソフと心の糸に触れ
優しさがソフトに心の糸に触れ
母はよし膝の丸さへ泣きにゆく
世の中を丸くまると鏡餅
五重丸はあちゃんの来る日待っている
ままごととわが家の生活さらけ出し
久々に逢えば暮しが先に見え
中流の生活のような顔ばかり
エリーとの故に財布には見栄も出る
苦しいと言わぬ財布を妻は持ち
苦しさを紛さす酒も借りた金
苦しさを紛さす酒も借りた金
好きて嫁き苦しい暮し口にせず
口だけはまだまだ達者と云う喜の寿
口先でまるで後手を考える
口にした言葉に責任負わされる
南海電鉄川柳部(大阪府) 辻 圭水報

節子 弘生 憲祐 勝美 静香 英子 久子 千代三 蘭 滋雀 小松園 君子 文秋 小雅子 あいき 綾女 圭水報 摩太郎 主水 小松園 柳伸 宏子 千代三 泉秋 白流 正梅 登志子 千万子 清女 綾女 勝美

無気力も金のことなら喋り出し
無気力な夫へ下からたきつける
無気力な男に肥かたてみる
無気力な旦那妻だけほろくそに
詰め込んで厨に仕舞う梅の壺
三井ヶ丘川柳会 高田 博泉報
流行の復活タンスをかき廻す
煮やす亡妻の炊事に目をさまし
笑いから涙へ芸のタイミング
綻びを合せて復活した夫婦
美しく老いて素顔を取り戻す
角筋の復活政治に目を見張る
復活をさせた童話がよく売れる
人肌の地蔵は民話の生きる里
風向きのまんま進んで鬼に会い
雲の峰迄続いている男坂
七転び八起き今年もよう生きた
窓きわでとうとうのおを見つめて
パン買いに行けば女房を尋ねられ
スクリーン遠ざかりゆく背の演技
下積みの演技に堪えていふし銀
知恵の輪がまだ外れない十二月
復活を考えている冷凍魚
演技力狭い舞台を広くする
荒れ狂う海面沈んでいる歴史
人生の幕降りるまでの演技
その日暮らして演技などいらぬ
猫の目を我関せずの深海魚
焼け木杭抱いて女は生き続け
巫役に徹して得がたい顔になる
愛人へ一日とってある師走

雅風 美乙女 柳選枝 東雲 与一 博泉報 隆子 孝山 晴風 江留美 亜也子 規不風 弘生 琴音 右近 柳歩 度 小路 光夫 てまり 野生 寿馬 三千子 重成 重鈍 一念 柳心 柳泉 英子

演技力ついて個性が活かされる
ブーメラン恋しき人を還さばや
十二月の京都の良さを知りはじめ
勝山双葉川柳会 河野 君子報 勝佐子 千世子 智恵子 千鶴子 静子 英子 田鶴子 静香 久子 節子 智子 君子
演技力ついて個性が活かされる
ブーメラン恋しき人を還さばや
十二月の京都の良さを知りはじめ
勝山双葉川柳会 河野 君子報 勝佐子 千世子 智恵子 千鶴子 静子 英子 田鶴子 静香 久子 節子 智子 君子
演技力ついて個性が活かされる
ブーメラン恋しき人を還さばや
十二月の京都の良さを知りはじめ
勝山双葉川柳会 河野 君子報 勝佐子 千世子 智恵子 千鶴子 静子 英子 田鶴子 静香 久子 節子 智子 君子

柳宏子 鬼遊 薫風 君子報 勝佐子 千世子 智恵子 千鶴子 静子 英子 田鶴子 静香 久子 節子 智子 君子 客遊子

● 募 集 ●

五月号発表表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句)	中島 生々庵 選
水煙抄 (10句)	菊 沢 小松園 選
愛染帖 (3句)	橘 高 薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「快適」	柴田 英壬子 選
「珍重」	北山 越山 選
「風習」	弘津 柳慶 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文
字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句)	中島 生々庵 選
水煙抄 (10句)	菊 沢 小松園 選
愛染帖 (3句)	橘 高 薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)	
「むし菌」	斎藤 通風 選
「オリビック」	柳 楽 鶴丸 選
「入梅」	田垣 方大 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま
す。★用紙はなるべく柳箋をご使用くだ
さい。

3月の常任理事会は3日 5時から

〒542
発行所 川柳塔社
大阪市南区幾谷中之町二〇番地

電話 大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三二六八番
普通預金口座番号・一〇二七八三

編集兼 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心社
印刷所 藤原 童心社

定価 四百円 (送料29円)
半年分 二千五百円 (送料共)
一年分 四千八百円 (送料共)
昭和五十五年二月二十五日印刷
昭和五十五年三月一日発行

お知らせ

4月7日句会の兼題は
「枝」「反動」「箆(かご)」
「天使」 柳話 西尾 葉

5月句会は7日(水) 6時から

6月6日6時から

瓢太著「紅華」刊行記念句会

7月7日6時から 路郎忌と
薫風さんを祝う句会

8月7日(木) 句会は6時から

常任理事会

3月3日(月) 5時から

4月3日(木) 5時から

5月1日(木) 5時から

ヤングのための
カジュアルウェア
Kurabo Fabrics
クラブウ
カジュアルウェア
倉敷紡績株式会社

・ペンペン草・

女性上位の月

★三月号は毎年女性特集をしてる。本年は少し時間食ったが「女性作家の横顔」をご披露することにした。「亭主閑白」は目をつむっていただく。

★麻生霞乃先生は八十八歳になられた。米寿である。路郎先生の分まで長生きしていただきたい。

★山川阿茶女史は生々庵主幹より一つ年上で今なお女医として第一線で活躍して

ヒトミン
肉体疲労時のVB₁補給に——
アリナミンA

アリナミンA 25の効能—肉体的疲労・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚氣、食説明書をよく読んで正しくお使いください。各くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



▼葉子コーナー▲

▼冬ざれの道ばたや垣根の間に、様々な緑の草が幼い葉を精いっぱい広げて、風を避けています。

▼駅のポストターには、スキースクールとハイキングが同居して行きます。三月は去り行く季節のウインターリースポーツと新しい春のスポーツが重なる季節なのです。

▼持病が出て寝正月をしたので、新年句会も人社会いらい始めて欠席。ご迷惑をおかけしました。

▼草の芽も私も、暖い春の到来を待ちわびているこの頃です。

★和田維久子さんは古稀で

★岩田美代さんが路郎賞と同賞優秀作を二回獲得しているが、これはすごい記録だと思ふ。まだまだ伸びる可能性があるだけにたのしみな人である。

★智子さんと君子さんが指導する「勝山双葉会」がこの三月で一周年になる。女性ばかりのグループとしてすこやかに成長している。これは智子さんと君子さんのお手柄だ。新人の中に西出英子さんのような優秀な人も伸びてきている。英子さんは二賞候補にも秀句鑑賞にも顔を出していて、故一栄さんのご夫君も「嫁のおかげで川柳との縁も切れずに」とよろこんでおられる。

★雑誌「漫才」のことで朝日新聞社会部の加藤氏と会ったが、女子大生で台本を書いている二人を紹介した。女子大生というだけにマスコミはほめてはおかれない。関西の女子大生はすでにマスコミに乗っかって、東京の女子大生はこれからの人である。このお嬢さんは川柳塔を二年ほど購

★女性柳人のよいところは同人費や誌代をめったにたにしないことである。早目に送金して下さる点、世帯上手というのであろう。★はめついでにもう一つ。なんでもそうだが、女性の集まるところには繁栄がある。句会もまた然り。

★今月は女性の方から相当点数をかせいだようだ。イヤほんとに頼りにしている。(不三田一三夫)

たのしさひろがるお買物

阪急

1階 婦人服・子供服
 2階 婦人服・子供服
 3階 婦人服・子供服
 4階 婦人服・子供服
 5階 婦人服・子供服
 6階 婦人服・子供服
 7階 婦人服・子供服
 8階 婦人服・子供服
 9階 婦人服・子供服
 10階 婦人服・子供服
 11階 婦人服・子供服
 12階 婦人服・子供服
 13階 婦人服・子供服
 14階 婦人服・子供服
 15階 婦人服・子供服
 16階 婦人服・子供服
 17階 婦人服・子供服
 18階 婦人服・子供服
 19階 婦人服・子供服
 20階 婦人服・子供服
 21階 婦人服・子供服
 22階 婦人服・子供服
 23階 婦人服・子供服
 24階 婦人服・子供服
 25階 婦人服・子供服
 26階 婦人服・子供服
 27階 婦人服・子供服
 28階 婦人服・子供服
 29階 婦人服・子供服
 30階 婦人服・子供服
 31階 婦人服・子供服
 32階 婦人服・子供服
 33階 婦人服・子供服
 34階 婦人服・子供服
 35階 婦人服・子供服
 36階 婦人服・子供服
 37階 婦人服・子供服
 38階 婦人服・子供服
 39階 婦人服・子供服
 40階 婦人服・子供服
 41階 婦人服・子供服
 42階 婦人服・子供服
 43階 婦人服・子供服
 44階 婦人服・子供服
 45階 婦人服・子供服
 46階 婦人服・子供服
 47階 婦人服・子供服
 48階 婦人服・子供服
 49階 婦人服・子供服
 50階 婦人服・子供服
 51階 婦人服・子供服
 52階 婦人服・子供服
 53階 婦人服・子供服
 54階 婦人服・子供服
 55階 婦人服・子供服
 56階 婦人服・子供服
 57階 婦人服・子供服
 58階 婦人服・子供服
 59階 婦人服・子供服
 60階 婦人服・子供服
 61階 婦人服・子供服
 62階 婦人服・子供服
 63階 婦人服・子供服
 64階 婦人服・子供服
 65階 婦人服・子供服
 66階 婦人服・子供服
 67階 婦人服・子供服
 68階 婦人服・子供服
 69階 婦人服・子供服
 70階 婦人服・子供服
 71階 婦人服・子供服
 72階 婦人服・子供服
 73階 婦人服・子供服
 74階 婦人服・子供服
 75階 婦人服・子供服
 76階 婦人服・子供服
 77階 婦人服・子供服
 78階 婦人服・子供服
 79階 婦人服・子供服
 80階 婦人服・子供服
 81階 婦人服・子供服
 82階 婦人服・子供服
 83階 婦人服・子供服
 84階 婦人服・子供服
 85階 婦人服・子供服
 86階 婦人服・子供服
 87階 婦人服・子供服
 88階 婦人服・子供服
 89階 婦人服・子供服
 90階 婦人服・子供服
 91階 婦人服・子供服
 92階 婦人服・子供服
 93階 婦人服・子供服
 94階 婦人服・子供服
 95階 婦人服・子供服
 96階 婦人服・子供服
 97階 婦人服・子供服
 98階 婦人服・子供服
 99階 婦人服・子供服
 100階 婦人服・子供服

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2 番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに

観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所

☎06-631-0222



南海電鉄